

会話時の発言抑制行動における印象評価に関する研究

**教育学研究科 学校教育専修
近藤 亜裕美**

提出日 平成 25 年 2 月 13 日 (水)

目次

第1章 問題と目的

1.1 はじめに	1
1.2 発言抑制行動について	4
1.2.1 発言抑制行動とは	
1.2.2 発言抑制行動に対する評価について	
1.3 社会的スキルについて	6
1.3.1 社会的スキルについて	
1.3.2 社会的スキルと発言抑制行動との関連について	
1.4 会話場面について	9
1.4.1 会話場面の行動的な側面について	
1.4.2 会話場面の話題内容に関する側面について	
1.4.3 会話場面の構成的な側面について	
1.4.4 本研究で扱う会話場面の設定について	
1.4.5 各会話場面のシナリオ構成について	
1.5 印象評定について	16
1.6 本研究の目的	19
1.7 本研究の仮説	19
1.8 本論文の構成	20

第2章 実験

2.1 目的	21
2.2 方法	21
対象者 / 実施時期 / 実験刺激について / 手続き / 質問紙の構成について	

第3章 検討I

3.1 各変数の記述統計量	28
分析対象者	
各変数の記述統計量	
3.2 会話の発言者発言者 A・B・C の特性形容詞尺度の結果について	34
3.2.1 課題解決場面における発言者 A の印象について	
3.2.2 日常会話場面における発言者 A の印象について	
3.2.3 発言者 A の印象についての会話場面間の比較	
3.2.4 課題解決場面における発言者 B の印象について	
3.2.5 日常会話場面における発言者 B の印象について	
3.2.6 発言者 B についての印象形成の会話場面ごとの比較	
3.2.7 課題解決場面における発言者 C の印象について	
3.2.8 日常会話場面における発言者 C の印象について	
3.3 ソーシャルスキル評定尺度について	54
3.3.1 会話場面間での発言者 A・B・C のソーシャルスキル得点の比較	
3.3.2 社会的スキルと特性形容詞尺度の関連について	
3.4 各評価対象者の全体的な印象項目について	59

第4章 検討Ⅱ

4.1 各変数の記述統計量	60
4.1.1 特性形容詞尺度の平均値比較	
4.2 各会話場面における社会的スキル得点の3者間比較	66
4.2.1 課題解決場面における社会的スキル得点の3者間比較	
4.2.2 日常会話場面における社会的スキル得点の3者間比較	
4.3 各会話場面における発言者の全体印象得点の3者間比較	70
4.3.1 課題解決場面における発言者の全体印象得点の3者間比較	
4.3.2 日常会話場面における発言者の全体印象得点の3者間比較	
4.4 会話に対する印象評価得点について	73

第5章 総合考察

5.1 本研究の概要	74
5.2 本研究における発言抑制行動が発言者の印象に与える影響について	76
5.3 本研究における社会的スキルの影響について	77
5.4 本研究における会話場面の影響について	78
5.5 今後の課題	79
5.6 終わりに	80

第6章 引用・参考文献	81
-------------	----

第7章 資料	85
--------	----

第1章 問題と目的

1.1 はじめに

本研究では、会話時に生じる発言抑制行動が、他者から印象としてどのように受け取られているかについて明らかにする。本研究では課題解決場面と日常会話場面という2つの場面を設定する。この場面の違いによって発言抑制行動に対する印象がどのように異なっているのかについて検討をしていく。

発言行動は、独り言でない限り、他者に向けられた行動であり、複数の人同士の相互作用である。したがって会話行動とは、発言行動を行った人間とそれとは別の他者の少なくとも二者間における相互作用であることが前提である。

しかし、人は普段の会話時に常に発言をしているわけではなく、他者の話を聴く時、話を待つ時、あるいは会話を続けたくないという意思表示のために発言を控えることがある。この「発言を控える」行動のことを発言抑制行動という。畑中(2003)によると発言抑制行動は、自分の意見や気持ちなどについて表出しない行動のことと定義されている。発言抑制行動が生起する理由や関連する要因はさまざま考えられ、行為者の発言抑制の行動意図はそれぞれ異なるということが明らかになっている。

しかし、会話に参加しているうちの片方が発話を抑制するとなると、その時点で会話の受け手（この場合は抑制行動をとった方に対する他者）は、会話が止まったことについていろいろと考えることとなる。つまり発言抑制行動の行為者（発言者）の実際の発言抑制行動意図がどうであるかに関わらず、行動の観察者（＝会話の相手、および会話を見ていた、あるいは聞いていた第三者も含まれる）は発言抑制行動に対して何らかの印象を形成し評価を行っていると考えられる。

ここで観察者が行為者に対して形成する印象としては、一般的にはネガティブなものと考えられる。スムーズな会話が途切れるため、会話の展開が予想通りには進まず、会話の受け手に疑問や困惑などを生じさせると考えられるからである。そのため発話者に対してはポジティブな印象は形成しにくく、ネガティブな印象が形成されやすいと言える。

一方で、発話者においても発話を抑制する理由があって発話を止めているので、場合によっては意図的に発話を控えていることも十分に考えられる。会話そのもののテーマや目指すべき、あるいは導くべき結論に至る過程で、途切れることなく会話が続くことの方がむしろ稀なことかもしれない。いずれにせよ、会話のなかで会話が抑制される事態において、そのことがどのように理解されるかということについて検討することにする。

さて、このような発言の抑制行動においては、会話の流れのなかで、本人の意思に関わらず不随意不本意に行う発言抑制行動と、本人の意思のもと意図的に行われる抑制行動があると考えられる。前者は、例えば相手からの質問の形で発せられた会話に対してうまく答えられないときなど、すぐに応答できずに黙ってしまうような場合である。後者としては、応答が必要な場合でも、一時的に一定の思考時間を作ったり、相手に質問をそのまま返すような場合などである。他にもいろいろな場合があると考えられるが、会話中の一時的な沈黙状態が、その会話の流れにおいて十分起こり得るものか、そうでないかということによって会話の印象は大きく異なる。

一般に、スムーズな会話を成立させるために個人が持っている要因として、社会的スキル（コミュニケーションスキル）が挙げられるが、スキルがあることによって会話がその場面において適応的に進んでいくことが考えられる。したがって、会話が途切れても（＝発言抑制行動が生じても）、その場の状況に合った抑制行動として理解される場合には、それはその人の持つ社会的スキルによって意図的に作られた会話状況であると考えられる。一方、状況に合っていない会話の途切れは、その人に社会的スキルが不足していることによって生じているものと理解されてしまう可能性があるのではないか。

本研究では、発言抑制行動を適応的かそうでないかを判断する指標として、社会的スキルを設定する。社会的スキルは、その場の規範や状況に合わせた発言抑制行動と正の関連を示し、一方でスキルが足りないことで生じる発言抑制行動と負の関連を示す要因である。

社会的スキルが高いと認識された人の発言抑制行動はその場に適応した行動として判断され、一方でスキルが低いと認識された人の場合は、不適応的な行動として判断されると考えられる。では、発言抑制行動が表出したときに適応的な行動を行っているかどうか、つまり社会的スキルが高いと認識されやすい場合と社会的スキルが不足していると認識されやすい場合の違いについて検討をする。

ところで、会話に関して言えば、様々なタイプの会話場面が存在する。とくに目的のない普段の日常会話を始め、目的のある議論の会話もある。インフォーマルでフランクでフレンドリーな会話もあれば、フォーマルで形式的でよそよそしい会話もある。それぞれの会話の状況は随分異なり、話題の内容やその状況などの要因によって、意味合いが異なると考えられる。例えば、議論の場面は結論を導き出すことやそこに近づけることが目標である。このときには基本的には結論にたどりつくために必要なやりとりが行われるであろう。この場面では発言までに時間がかかってもよく考えられた的確な発言をすることが好

ましいとされるであろう。一方で、友人同士で雑談をしている場面では、目指すべき結論がないので段々と会話内のトピックが変わっていくため、その変化に応じた活発なやりとりが必要になるだろう。このような場面では深く考え込むよりも思いつくまま発言をすることが好ましいとされるであろう。つまり会話の質によってそこで求められる適応的な行動は異なると考えられる。

そこで本研究では、「課題解決場面」と「日常会話場面」という質の異なる 2 つの会話場面を設定する。課題解決場面は結論に到達するなどの特定の目的を持った話題内容であり、議論などの比較的フォーマルな場面とする。日常会話場面は会話をする事自体が目的になるような話題内容であり、雑談などの比較的インフォーマルな場面とする。課題解決場面での発言抑制行動は、「応答する内容を吟味している」という印象を与えて適応的な行動として捉えられると考えられる。一方、日常会話場面での発言抑制行動は、「社会的スキルの不足から言葉が出てこないのだ」などの印象を与えて、不適応的な行動として捉えられると考える。

ところで、人は他者に対して相手の容姿や行動、態度などの断片的な情報を手掛かりにして印象を形成している。会話場面で発言抑制行動を観察した際にも何らかの印象は形成されると考えられる。しかし、日常的な場面においては、対象となる行動からだけでなく、基本的な態度や行動、さらにその人の外見などの要因からの手がかりも総合して考慮されて印象形成がなされている。そのため、例えば全く同じ発言を行っていたとしても、その声の大きさ、話し方、話す速さなどの要因が異なれば印象も異なるということである。そのような周辺的な要因が印象形成に大きな影響を与えるということもあるため、本研究においてはそれらの要因による影響をなるべく減らすために、視覚による影響力を排除して検討を行う。

本研究では、3 者間の会話場面を取り上げる。課題解決場面と日常会話場面の 2 種類の会話場面を設定し、それぞれに抑制あり条件(実験群)と抑制なし条件(統制群)を設定する。各会話場面の抑制あり条件では会話に参加している 1 人に発言抑制行動を表出させる。その他の 2 人については抑制あり条件・なし条件ともに全く変化をつけない。それぞれの条件で会話を行っている 3 人に対する印象と社会的スキルの評定を行い検討する。評定の際には、会話中の態度や外見などの要因が影響しないように、視覚的な刺激は与えずに声のみで評定させる。抑制の有無での比較や、会話場面間の違いの比較を通して、発言抑制行動に対する印象がどのように異なるのかについて明らかにする。

1.2 発言抑制行動について

1.2.1 発言抑制行動とは

人は会話行動において、様々な理由により発言を控えることがある。この「発言を控える」という行動のことを発言抑制行動という。発言抑制の行動は、たとえば相手の質問にすぐに答えることができず自分の判断で発言を一時的に止めるという場合もあるし、自分が話そうとするタイミングで相手が再び会話を開始して発言を控えざるを得ない場合もある。つまり発言抑制が自律的か他律的にかにかかわらず、自分の意見や気持ちなどについて表出しない行動のこと（畑中,2003）である

一般的に自分の会話を取えて伝えない、あるいは伝えることができないという行動はコミュニケーションの回避であるとして不適切なコミュニケーション行動として捉えられてきた(坂本・プリブル・キートン,1998)きらいがある。しかし、会話の状況や相手の様子によっては、発言を控えるほうが適切である場面もあると考えられる。例えば、自分が発言をしたいと思っても、相手の意見を最後まで聴く必要がある場合や、相手の気分を害す内容については発言を控えることのほうが適切であろう。コミュニケーション回避のための発言抑制と会話の状況や相手の様子に合わせた発言抑制はどちらも「発言抑制行動」ではあるが、これらの行動を同じものとして理解することはやはり無理があり、行動の生起する場面や動機などのいくつかの基準によって分類されるものと考えられる。

この点について畑中(2003)は、発言抑制行動と精神的健康の関連についての研究の中で、自己開示度と精神的健康の関係が、単純な比例関係であることを報告する研究ばかりでないと、和田(1995)や Cozby(1973)を挙げて、発言抑制行動と精神的健康の關係に言及している。これらの研究では、開示と精神的健康の關係性は単純に開示量にのみ左右されるわけではないということを示唆している。他者全般に対して開示度が高すぎるもしくは低すぎる場合には適応的ではなく、重要な他者には高い開示度を示し、それ以外の他者には中程度の開示度を示すものがもっとも精神的に健康であると推定されている。自己開示における「非開示」の行動は発言抑制行動と意味合的に重複する部分が多いため、発言抑制行動においても単純な抑制量だけで判断しにくいということであり、スキルや動機などの規定因についての考慮も必要であると考えられる。

これに関して、畑中(2003)では、会話において発言抑制行動を生じさせる動機や状況に関して 5 側面を挙げている。すなわち①相手志向 ②自分志向 ③関係距離確保 ④規範・状況 ⑤スキル不足 である。畑中(2003)では、これらの 5 側面と精神的健康にどのような

影響を与えるかについて検討がされた。その結果、抑制頻度が高いほど精神的健康が低下するということがスキル不足の側面で見られた。一方で、女性では、抑制頻度が高いほど精神的健康度が高まるという正の関連が規範状況の側面で見られた。つまり、発言抑制行動においても、抑制を生じさせる規定因によって、行動の持つ意味合いが異なるということがいえる。発言抑制行動を取るまでには様々なパーソナリティが意思決定に影響を与えているために、一見すると同じように見える行動でも、その行動をするに至った経緯は異なるという性質を持つということである。

1.2.2 発言抑制行動に対する評価について

発言抑制行動が生起する際にその規定因によって行動の持つ意味合いが異なることについては前項で述べたが、発言抑制を観察した他者による評価についても、同様のことが言えるのではないかと考えられる。つまり、他者の発言抑制行動を観察した際に、どの要因と関連して意味づけをされ、印象付けられるかによって、行動に対する評価は異なるということである。

本研究では、発言抑制行動の生起と関連があると考えられる要因について社会的スキルを取り上げる。先の畑中(2003)において社会的スキルは発言抑制行動と正の関連があると指摘されていることと、一方で負の関連も指摘されていることから、いずれの場合においても発言抑制行動と何かしらの関連があるものと考えられる。

発言抑制行動が表出されたときに、社会的スキルについても測定を行うことで、その発言抑制行動の行動意図を、観察者がどのように推測したかの手がかりになると考えられる。

1.3 社会的スキルについて

本研究では、発言抑制行動を行った際の話者の印象に関連する要因として社会的スキルを取り上げる。社会的スキルは、発言抑制行動の抑制要因のうち、「規範・状況」つまり、周囲の状況や相手の様子などの規範に合わせた発言抑制行動とは正の関連を示し、「スキル不足」つまり、社会的スキルの不足による発言抑制行動とは、負の関連を示すことが明らかになっている。そのことから、社会的スキルが高いと判断された時の発言抑制行動は「規範・状況」の発言抑制行動であり、逆に社会的スキルが低いと判断された時の発言抑制行動は「スキル不足」の発言抑制行動であると考えられる。本研究では、直接発言抑制行動の意図を測るのではなく、社会的スキルを測定させる。それにより、評定者が観察した発言抑制行動の意図をどのように推測しているのかということについての指標とする。

1.3.1 社会的スキルについて

社会的スキルとは、「対人場面において、個人が相手の反応を解釈し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制したうえで対人反応を実行するまでの循環的な過程」（相川，2009）のことである。

会話は「話すこと」と「聴くこと」から構成されているわけなので、社会的スキルの中でも聴くスキルと話すスキルが特に必要になってくると考えられる。会話に参加している人たちの聴くスキル、話すスキルがその会話の展開や進行にある程度影響を持っていると考えられる。

相川(2000)は聴くことの機能のうち主要な3つを挙げている。1つ目は情報を得ることである。相手の話している内容から、相手の考えていることや感じていることなどを理解しやすくなり、その先の自分の発言に生かすことができるようになると考えられる。きちんと相手の話を聴いておかないと、会話の中で共有されている情報が何かわからず話題についていけなかったり、自分が話すべき時になってもそのことがわからないなどの状況が生じてしまう。2つ目は相手に社会的報酬を与えることである。相手の話を聴くことで「存在の肯定」「注目」「尊敬」「同情」などの社会的報酬を与える行為になり、相手に安心を与えることができるのである。逆に話をきちんと聴かないと、相手に不安を与えることになるということである。そして3つ目は相手との関係を安定させることである。話を聴き、相手について情報を得ることで相手に対してよりの確な反応行うことに繋がり、さらに相手から情報を引き出しやすくなるという好循環が生じる。このように、きちんと「聴く」

ことができるかどうかによってきちんと「話す」ことができるのかということに繋がり、会話が上手く成立するかどうか左右されるということであろう。

さらに、相手の話をきちんと聴けて情報を得ることができても、「話す」ことが上手くできないことで会話が継続しにくくなっていくことも考えられる。例えば、相手の話を聴いたときに得た情報を自分が話す番になった時にうまく統合して自分の発言に組み込むことができない、または発言の構成の仕方や発言すべき内容がわからないなどの場面である。

これらのような状況において、発言が抑制されてしまったのであれば、スキルの不足による抑制であると言えるであろう。

本研究においては、発言抑制を行っていることに対する評価を見るため、主に「話している時」のスキルがどうであるのか、ということについて取り上げる。本研究においては発言抑制行動を表出しているも、多少は発言をする機会がある。発言が少なくても、社会的スキルが高いと認識されれば、「規範・状況」による発言抑制行動であると捉えられるだろうし、逆であれば「スキル不足」による発言抑制行動であると捉えられるだろう、ということである。

「話す」スキルを主に取り上げるが、会話行動は上でも述べたように、「話す」と「聴く」ことを交互に繰り返している。そのため話すスキルだけではなく、「聴く」スキルについてもふれておく必要がある。聴くスキルについては、頷きや相手の注視をしているかというようなものではなく、きちんと相手の話を聴いた上で発言をしているかどうか、というような「聴く」スキルと「話す」スキルの両方を持つような内容について評価させることとした。

1.3.2 社会的スキルと発言抑制行動との関連について

また、社会的スキルのひとつである主張性スキルについて、渡部(2006)は「考えや感情の素直な表現」「感情に流されない表現」「他者や状況への配慮に基づいた柔軟な対応」「行動に対する主体的な判断」の4つの理論的要件をあげている。一つ目の「考えや感情の素直な表現」は自分の考えていることや感じていることの率直な表現のことであり、主張性の基本となるものである。二つ目の「感情に流されない表現」はその時の感情や情動に左右されずに冷静に自分の意見や感情を表出することである。これは Alberti&Emmons(1990)の攻撃性を持った行動や受身的な行動それと対比するものである。三つ目の「他者や状況への配慮に基づいた柔軟な対応」は主張的な行動を行う際の相手や状況の把握や行

動結果の予測、相手や状況に合わせた行動の調整を行い、柔軟に行動を変化させることである。これが必要なのは、主張性には自分の意思・意見の表明だけでなく相手や周囲への配慮も包括されているためである。最後の「行動に対する主体的判断」は主張的な行動を行う際の対人目標の決定や対人反応の検討・選択が含まれている。これは、主張性という概念が、常に自己主張を強制するものではなく選択肢の1つとして存在していることを示すものである。つまり、自分の考えを全て表出させることを推すものではなく、その場の状況や相手の様子を考慮に入れて、「話すべきではない」と判断した際には「話さない」ということも主張性になるということである。

発言抑制行動の生起要因と照らして考えると、「考えや感情の素直な表現」ができていない『非主張』的、つまりスキル不足や自分志向による発言抑制行動と、「行動に対する主体的判断」から『主張しない判断』をした結果、つまり相手志向や関係距離確保、規範・状況の要因による発言抑制行動は性質の異なるものであるだろう。一方では社会的スキルが不足していることによる発言抑制であり、もう一方では社会的スキルが高いからこそ生じる発言抑制である。社会的スキルと発言抑制行動の関連は、それぞれのどの側面と関連するかによって、意味合いや評価が異なるものであると考えられる。

1.4 会話場面について

本研究では、発言抑制行動を行った人に対する評価の差に影響を与える要因として会話場面を取り上げて検討を行う。一言で会話といっても、会話行動には様々な特徴があり、いくつかの観点から分類がなされている。

本研究では会話場面として『課題解決場面』と『日常会話場面』の2つを用いて検討を行う。課題解決場面は議論や話し合いのような話題で構成される会話場面であり、日常会話場面は所謂雑談のような話題で構成される会話場面として設定をする。

ここでは、本研究で用いる2種類の会話場面について行動的な側面と話題内容に関する側面、さらに会話行動の構成についての側面について、各場面の違いを挙げたうえでそれぞれの特徴を述べる。

1.4.1 会話場面の行動的な側面について

藤本・大坊(2007)は、討論条件と親密条件という2つの条件を挙げ、それぞれの特徴について次のように述べている。討論条件ではあるテーマについて共通の見解を導くことが目的となっており、ひとつのトピックに対して、お互いに意見を出し、評価を行うという形で進めていくのが効率的である。そのため、発言権の交代は頻繁には行われず、話し手が自分の意見がある程度まとめて伝えるという会話パターンが取られる。一方、親密条件においては、特定の話題の深化よりも、広く浅く、多様な情報について活発なやりとりが行われる。この条件下においては、相槌や同意、短いコメントや要約が頻繁には含まれるという特徴も持っている(藤本・村山・大坊, 2003)。

藤本・大坊(2007)でも、討論条件は議題について共通見解を出すための討論を行い、親密条件ではお互いを知るための雑談を行う、という目的で用いられていた。本研究においても、討論条件の特徴を課題解決場面の特徴、親密条件の特徴を日常会話場面の特徴として位置付けることとする。

また、藤本・大坊(2007)は、会話展開を①トピックの開始 ②情報追加発展 ③具体化詳細 ④抽象化要約 ⑤無関連 の5つのカテゴリーに分け、討論条件と親密条件での差を検討した。その結果、討論条件においては、会話の内容を深めたり、要約する発言が多く表出されることが明らかになった。さらに、5つの会話展開のカテゴリーと個人特性の関係をもとにして、討論条件においては、司会型・論者型・傍聴型・収束型・拡散型の5つ、親密条件においては、主導型・促進型・傍参加型・情報提供型・深化型の5つの会話

展開パターンを分類している。各会話場面において、これらの会話展開パターンが組み込まれる会話場面を作成して検討していく。

また、話題などの要因によって、印象評価に与える影響が異なることが明らかになっている。磯ら(2003)は3者間コミュニケーション場面で、非言語行動と印象の関連について「討論」と「親密」の2つの条件で検討を行っている。結果として、状況に適した内容を話すことが印象に結び付くということが示唆されている。また、話題条件によって会話に対する満足度や印象形成に関連するコミュニケーション行動に影響があることが明らかになっている。会話には様々な種類があるが、その特徴によって話者の適切な行動は異なるということである。会話の中でどのような発話をするのが望ましいかということは、その会話の持つ特徴によって異なるということである。

発言抑制行動を行った側の意思決定の過程では、様々なパーソナリティが関連している。会話の状況に対する判断から意識的に発言抑制が行われたのか、自分の意識に関わらず抑制せざるを得なくなってしまうのか、また、その抑制によって会話の展開が促進されるのか抑制されるのかなどによって適切性が異なるとされている。しかし、人は、他者がどのような意図を持っているのかということには関わらず、他者の発言抑制行動を見て、何らかの印象を持つと考えられる。今回取り上げる課題解決場面と日常会話場面の違いによっても印象に差は生じると考えられる。

1.4.2 会話場面の話題内容に関する側面について

畑中(2006)では、抑制が生じる会話状況について、①親しくない人への開示 ②親しくない人に対する否定的感情の表出 ③要求の拒否 ④個人的意見の主張 ⑤友人への開示 ⑥友人に対する否定的感情の表出 ⑦会話継続困難 の7つを挙げている。発言抑制行動が生じる状況を規定する主要な要因としては対象との関係性と会話継続の困難な状況であるということが明らかになっている。これらの中で日常的に経験されやすい会話場面は、「個人的意見の主張」「友人に対する否定的感情の表出」「会話継続困難」であった。

本研究では、「個人的意見の主張」の中から「友人同士で議論になって自分の意見を言う」「大勢で話している中で自分の意見を言う」、「友人に対する否定的感情の表出」の中から「会話をしていて友人の態度や意見が間違っていると感じた」といった会話状況を取り上げて、会話場面を設定する。これらは畑中(2006)においても特に経験する割合が多い会話状況であったし、「仲のよい友人に自分のつらい思い出について打ち明ける」「友人に誰

かの悪口を話す」などの会話状況に比較すると様々な話題で生じやすい会話状況であると
考えられるためである。「自分の意見を言う」状況や「友人に対する否定的感情の表出」を
する状況で、それらに該当する発言を抑制しているという条件（抑制あり条件）とそれら
を抑制せずに表出（発言）しているという条件（抑制なし条件）に分けて、差を検討して
いく。本研究における各会話場面で、発言抑制行動のなされる具体的な発言内容や頻度
については方法(第2章)で述べる。

会話がどのような目的で行われているかということも会話の種類によって異なると考
えられる。浦・桑原・西田(1986)では問題解決のような明確な目標を持つ会話では、単なる
情報交換や消費的コミュニケーションのような目的の明確でない会話に比較すると、既出
のいくつかの情報を関連づけるような意見や相手の発言に対する評価を行う発言が多く見
られ、情報のやりとりを行おうとするような発言や会話の方向性を中心的もしくは周
辺的に変化させるような発言はあまり見られなかった。問題解決を目的とした会話にお
いては、どのような議題なのか、つまり会話の目的や方向性について、ある程度は会
話をしている者同士で共有されていると考えられる。そのため、お互いが必要な情
報を精査して出し合って、むしろそれらの情報をまとめていくことや、出された情報
に対する評価を多く行うことで結論に導いてくような会話のスタイルであると考え
られる。一方で、雑談などの明確な目的がない会話は、その会話行動で目指すべき
目標が共有されていないので、会話中にも方向性がどんどん変化していき、方向
づけされるごとに情報の提示を行っていくようなスタイルをとると考えられる。こ
のように会話に目的があるかどうか異なるだけでも、その会話をスムーズに進めて
いくのに必要かつ適切な発言内容も異なるということである。

それに関連して、池田(1991)は、行動に対する目標を達成性の目標とコンサマト
リー性の目標の2種類に分類をしている。達成性の目標は特定のモノやコトの獲得・
達成をめざすという点でプロダクト志向性という共通した特徴を持っている。一方
で、コンサマトリー性の目標は、あることを体験すること、あることを行うプロ
セスそれ自体が目標になる類の目標としている。達成性の目標を持った会話は最
最終的に「結論を見出す」「意見を集約する」などを達成することを目標としたも
のであり、コンサマトリー性の目標は「会話することを楽しむ」ということを目
標としたものであると言える。そのため、上述の浦ら(1986)での消費的コミュニ
ケーション場面は、コンサマトリー性の目標を持っている会話場面であるという
ことが言える。

これらの要素も本研究で用いる課題解決場面と日常会話場面の特徴として取り上げる。つまり、課題解決場面の会話では達成性の目標を持っていて、お互いが出し合った情報に対して評価し合い、結論に導いていくというスタイルを持ち、一方で日常会話場面の会話では、コンサマトリー性の目標を持っていて、会話の方向性が定まっておらず、方向性が変化するごとにそれに適した情報の提示が行われるというスタイルを持つものである。

1.4.3 会話場面の構成的な側面について

「会話」という行動を成立させるためには2人以上が必要である。また、その中では必ず「聞き手」と「話し手」という役割が存在している。会話を二者で行う場合、「聞き手」と「話し手」が一人ずつで構成され、常に「聞き手」と「話し手」を交代しながら会話を進める。会話に参加する構成員が三者以上になると「聞き手」が分化し、「受信者」と「傍参与者」となる。三者以上での会話では「話し手」「受信者」「傍参与者」で会話は構成される。こちらについても、役割を交代しながら会話を進めていく(藤本・大坊,2007)。

会話場面においては役割が流動的であるので、二者間での会話場面においては、基本的に交互に発言する必要がある。小川(2000)では、二者間の発話量について一方が話している時間が多いと、もう一方は話を聴いて相槌を打つ時間が多くなるため、二者間の会話については自然に発話量の多少が生じるという知見がある。このように完全に二者の発言量はイコールにはならないが、どちらかに発言抑制が生じると完全に「聞き手」と「話し手」が固定されてしまうことになり、会話そのものが継続困難になってしまう。そのため二者の会話時には発言抑制行動は生じにくくなると考えられる。一方、三者以上の会話場面においては、傍参与者として会話に参加していれば必ずしも次の発言者になる必要がない、つまり「話し手」の割り当てが少なくなるため、二者間の会話よりも、発言抑制が自然に生じると考えられる。そこで、本研究において取り上げる会話場面での構成員を3人とする。自然に発言抑制行動が生じる環境での会話場面を取り上げる。

また、会話の構成員同士の関係性についても考慮する必要がある。会話構成員同士の関係性によって、望ましい会話の進め方や適切な言葉遣いなどが異なることが考えられる。例えば、教師と学生や先輩と後輩という上下関係が存在する場合においては、それぞれの立場で規範が生じてそれぞれが取るべき行動や言動が生じる。上下関係がある話者間では、下位者は上位者に対して配慮した行動を取り、下位者は上位者に要求することが少ないことが明らかになっている(山口,2003)。この上下関係の程度によって、必要な配慮の度合い

も変わってくるであろう。例えば先輩後輩関係での先輩への配慮と、師弟関係での教師に対する配慮は同一ではなく、また、同じ「先輩後輩関係」という関係性にある者同士でも、それぞれの関係に適切な関係性があると考えられる。本研究では、それらの微妙な関係性にまでは言及しない。関係性による配慮などの特殊な行動が表出しないように、会話構成員同士の上下関係を想定せず、友人関係を取り上げることとする。

さらに、上下関係のない関係性についても、会話構成員同士が既知なのか未知なのか、またはどの程度親しいのかといった要因も関連してくると考えられる。初対面の場合には、相手についての情報が乏しい状況なので、出方がわからず控えめな態度を取ることが多いが、親密になることで接し方がわかり、より多く自分の意見を伝えることができる(西原・砂山・谷内田,2007)ということが明らかになっている。初対面同士では、相手の出方を伺って発言を控えているという一辺的な判断がなされやすい。その上、会話全体として発言を控える傾向が望ましい行動となり発言抑制行動を表出していることが強調されないかもしれない。そのため、ある程度の親密度があり、より多く意見を伝えることができる状況の方が、その行動意図について様々な予測が可能であると考えられる。よって、本研究では、親しい友人関係を想定して会話場を設定する。

1.4.4 本研究で扱う会話場面の設定について

本研究においては、上に挙げた西田ら(1988)や藤本ら(2003)の知見を基に、実験的に課題解決場面と日常会話場面という2種類の会話場を設定する。

まず、前項までの内容を踏まえ、課題解決場面、日常会話場面とも共通する要素を3つ挙げておく。まず1つ目は、会話の構成人数は3人とする。先に挙げた小川(2000)から、2者間の会話場面よりも発言抑制行動が表出されやすいだろうと考えたためである。

2つ目は、会話の構成員3人の関係性を友人関係とするということである。これは、山口(2003)や西原・砂山・谷内田(2007)から上下関係や初対面といった関係性では、気遣いや相手の出方を伺うなどといったその関係性に特有の行動が生じることが考えられる。また、上下関係における「気遣い」の有り方も一様ではないと考えられる。つまり、下位者が上位者に気遣いをした結果、より多くの発言をする場合も、上位者の発言を多くするために発言抑制を行う場合も考えられるということである。どちらの状況が生じるのかということは、それぞれの人間関係がどのようにあるのか、ということによって異なってくると考えられる。そのため、関係性についての特殊な条件を排除して、特定の条件にすることで

発言抑制行動の行動意図の推測や行動の強調ができると考えられるためである。

3つ目は、各会話場面において、「友人同士の議論になって自分の意見を言う」状況、「大勢で話している中で自分の意見を言う」状況、「会話をしていて友人の態度や意見が間違っていると感じた」状況で発言抑制行動を表出させることとする。

ここで課題解決場面、日常会話場面それぞれの特徴を「行動」「話題」の2点からまとめる。

まず、課題解決場面は、議論や話し合いの場面を想定した会話場面である。行動の点についての特徴はひとつのトピックに対してお互いに意見を出し合い評価を行うという会話のスタイルを取るということである。また、発言権の交代は頻繁には行われず、話し手が自分の意見がある程度まとめて伝えるという会話パターンをとる。会話の内容を深めたり、要約する発言が表出されるということである。また、会話の参加者が司会型・論者型・傍聴型・収束型・拡散型の5つのいずれかの会話展開パターンを取るように構成された会話場面である。話題の点については、あるテーマについて共通の見解を導くことを目的とする、つまり達成性の目標を持つ会話場面である。さらに、この会話場面においては、議論や話し合いをしている場面であるということを強調させるために、ですます調を用いて丁寧な口調で会話を行う。

一方、日常会話場面は、雑談のような場面を想定した会話場面である。行動の点については、課題解決場面とは異なり、特定の話題の深化よりも、広く浅く、多様な情報について活発なやりとりが行われる。話の内容が整理されたり意図的に展開されることなく、その場の流れ次第でトピックが頻繁に変わっていくという会話パターンをとるということである。相槌や同意、短いコメントや要約が頻繁には含まれるという特徴も持っている。会話の参加者が主導型・促進型・傍参加型・情報提供型・深化型の5つのいずれかの会話展開パターンを取るように構成された会話である。話題の点についてはコンサマトリー性の目標を持った会話場面である。さらに、この会話場面においては、雑談の場面であるということを強調させるため、課題解決場面とは対比して、くだけた話し方で、平語を用いて会話を行う。

1.4.5 各会話場面のシナリオ構成について

本研究では、課題解決場面と日常会話場面の各場面について具体的なシナリオを設定して、それに基づいた会話に対しての評価を検討する。

それぞれの場面については、課題解決場面は議論や話し合いの場面、日常会話場面は雑談の場면을想定するということは前項まで述べたが、本項では、具体的な話題内容について述べる。

問題解決場面は、大学の授業でたびたび取り入れられる学生同士の話し合いの場면을想定し、「進路選択などに関連して、文系と理系に分ける必要があるのかどうか」というテーマについて話し合う場面を設定した。

日常会話場面は、休み時間などにおける学生同士の雑談の場면을想定し、「ゼミの旅行の先をどこにするか」について話す場面を設定した。なお、この場面においては、前項でも述べたように、コンサマトリー性の目標を持った会話場面であるので、行先を決めるのではなく、行先について情報を出し合い、次々と会話の方向性が変わっていくような状況を想定している。

以上の2つの会話場面において、発言抑制行動の有無によって、会話の構成員の印象がどのように異なるのかについての検討を行う。

1.5 印象評定について

人は他者の外見やコミュニケーション行動から何らかの情報を受け取り、印象を形成している。印象形成とは、対人認知において主要な側面の一つであり、容貌・声・身振り・風評など、他者に関する限られた情報を手掛かりにして、その人物の全体的なパーソナリティを推論することである。

印象形成に関する従来の研究には顔の相貌に焦点を当てているものが多くあるが、その他にも表情や身振り手振りなどの非言語的なコミュニケーション行動からも印象が形成されることはすでに明らかになっている。さらに、声のトーンや大きさ、話す速さなどのパラ言語からも印象形成は行われている。つまり人は観察可能な様々な要因から手がかりを得て他者に対する印象を形成しているということである。人は相貌や様々なコミュニケーション行動などの断片的で限られた情報からでも、ある程度まとまりを持った印象形成を行うことが可能である。

これは、人が「人の性格」というものに関する考え方や信念の体系、つまり暗黙の性格観を持っているからである。この、暗黙の性格観の構造的側面を強調した概念として、対人認知構造がある。これは、「人が他者のパーソナリティの認知に際して働かせる多次元の認知空間」(林,1979)と定義されており、この対人認知構造の基本的3次元として林(1978)は、「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」を想定している。それぞれ、「個人的親しみやすさ」は他者に対する好感や神話に関する対人的評価次元であり、「社会的望ましさ」は道徳的、知的側面に関する課題関連の評価次元であり、「活動性」は強靱性などに関連する次元である。林(1978)の基本的三次元の枠組みからパーソナリティ認知を捉える研究は多くなされている。

また、対人認知の過程において、様々な要因が複雑に絡み影響を与えているが、要因を大別すると、①認知者の要因、②被認知者の要因、③状況の要因となる(Tagiuri,1958;Srauger&Altrocchi,1964)。認知者の要因、被認知者の要因について検討された研究は多いが、状況の要因について検討された研究は少ない(福田,2004)。

例えば、被認知者の要因について検討した研究として、小川(2000)はインタビュー場面で話者に対する印象を林(1978)の基本的3次元を用いて検討した。そこで、発言量が多い人の方が、発言量が少ない人よりも個人的に親しみやすいと認知されることが明らかにされた。また、小川(2000)においては、発話の仕方についても断片的発話を用いる話者の方が、叙事的発話を用いる話者よりも社会的望ましさが高く評価されるということが明らか

になっている。これは発言量の多少や発話のスタイルで対人認知的な評価が異なるという結果が得られた研究であるが、実験場面としてインタビュー場面を取り上げて設定している。インタビューの場面では多く発言を行い、相手の質問に的確な反応を短く行うことが好ましい場面であったので、このような結果が出たという考察がなされている。印象形成について、会話場面などの状況の要因の影響を考慮して検討する必要があるということが言えるのではないだろうか。

また、言語的コミュニケーションにおけるメッセージの効果として、小川・吉田(1998)では、日常的な会話場面における決め付け型発話の効果について検討されている。その結果、会話場面の違いに関わらず、決めつけ型の発話を行うほうが、そうでない人よりも、活動性は高く、社会的望ましさと個人的親しみやすさは低く評価されることが明らかになっている。ここから、相手にどのような印象を持たせたいと思っているのかによって、どちらの発話スタイルをとることが望ましいのかということが変わってくる、ということである。活発な人だと思われたい時には活動性を高く評価される決めつけ型発話は有効であるが、親しみやすい人だと思われたい時には逆効果になるということも指摘されている。

また、場面によってもどのような印象が「好印象」になるのかは異なると考えられる。落ち着いて静かに話をするのが望まれるような時には活発な印象を与えても好印象とはならないだろうし、緊張感を持って話すことがのぞまれるような時には必要以上に親しみやすい印象を与えると考えられる。

また、会話場面では「話し手」でいるときの話し方や態度だけでなく「聞き手」でいるときの態度についても他者に与える影響は大きい。川名(1986)、小川(2000)によると、聞き手の相槌や頷きは聞き手の好意的評価に関連するということが明らかになっている。相手の方を向きつつ頷きながら聴く場合と、相手の方を見ずに頷きもなく聴いている場合では、前者は「話を聴いている」というサインや話に対する同意などの意思表示を話し手に送ることができるが、後者は話を聴いているということも、その話についての意思表示も相手に送ることはできない。もちろん、人間関係を円滑に行うためにはきちんと相手の話を傾聴する態度をとることが好ましい行動であり、適応的な行動をとることで相手からの印象も自然と良くなっていくと考えられる。

他者からのメッセージを受け取る際に、言語の内容そのものよりも、声のトーンなどの聴覚的刺激や身振りなどの視覚的刺激のような非言語的な手がかりから意味合いを理解するという実験結果(Mehrabian & Wiener, 1967)などが示すように、印象形成を行う際には

外見や非言語的コミュニケーション行動が印象形成の手がかりになるということは、発言抑制行動の行為者の印象評定を行おうとしても行動それ自体以外の外見や態度全般も総合して印象形成されるということになる。また、「会話時の印象」は「話し手」でいるときと「聞き手」でいるときの両方の態度から形成されるものである。同じ場面であっても、傾聴の態度を取りながらの発言抑制と、相手の話を無視する態度を取りながらの発言抑制では、前者の方が良い印象になり、後者の方が良くない印象を与えることは明白であろう。つまり、発言抑制行動の行為者の様子や外見も観察して印象評定をしてしまうとそこから社会的スキルの有無などについて評定が行われて印象形成がなされてしまうため発言抑制行動に対する純粋な印象の測定が難しいということである。相手の話をどのように聴いているのかというような行動を抜きにして、他者の「黙っている」という行動そのものに対して、人はどのような印象を持つのかということに焦点を当てて検討を行うため、本研究では、話者の外見や態度等の視覚的要因を可能な限り排除して検討を行うこととする。

畑中(2006)では、各研究は異なる意思決定において生じた発言抑制行動に焦点を当てて検討してきたため、外的には同一に見える発言抑制行動もどう行動に先立つ意思決定は一樣ではなく、意思決定のありかたによって行動の適切性が異なってくると指摘している。

これらの要因は発言をする側が発言抑制行動をとる際の心理的な要因であるが、その行動によって他者へ与える印象も同様なのであろうか。また、発言抑制行動に対する他者からの印象が異なる場合、他者からはどのように印象評定されているのだろうか。また、会話の上手さについても、どのように評価されるのだろうか。

1.6 本研究の目的

本研究では、3者間の会話場面における発言抑制行動に注目して、会話場面の違いによって他者に与える印象がどのように異なるのかを明らかにすることを目的とする。評価対象者の印象評定と併せて、社会的スキルを測定し、発言抑制行動に対する評価を適切と捉えているかどうかについての指標とする。また、会話全体の印象についても測定を行い、発言抑制行動が会話全体に与える影響についても検討を行う。

印象の検討について、まずは、会話場面の違いや発言抑制行動の有無でどのような違いが生じるのか評価対象者それぞれで検討を行う(検討Ⅰ)。ここで発言抑制を表出している者だけでなく、その会話に参加している他者に対する印象についても検討を行う。そこから発言抑制行動が行為者以外の印象にも影響を与えるのか行為者の印象のみに影響を与えるのかについて明らかにする。次に、評価対象者全体や会話全体としての印象を把握し、会話場面ごとに比較検討を行う(検討Ⅱ)。会話状況に発言抑制行動をする者がいる場合といない場合とで会話全体に対する評価がどのように異なるのかについて明らかにする。そして、検討Ⅰと検討Ⅱの内容を基に、3者間の会話場面における発言抑制行動に対する印象評価について総合的に述べる(総合考察)。

1.7 本研究の仮説

・課題解決場面において、発言抑制行動あり条件の方がなし条件よりも社会的スキルは高く評価されるだろう。一方で日常会話場面においては発言抑制行動なし条件の方があり条件よりも社会的スキルは高く評価されるだろう。

これは、課題解決場面での発言抑制行動は規範・状況要因によるものであり、周りの様子がきちんと把握できている、つまり社会的スキルがあると認識されるということである。一方で日常会話場面での発言抑制行動はスキル不足によるもので、その場で何を話したらよいかかわかっていない、つまり社会的スキルがないと認識されるということである。

・発言抑制行動は行為者だけでなく、会話に参加している他の人に対する印象にも影響を与えるだろう。例えば、発言抑制行動を生じさせるような働きかけがあれば、その働きかけを行った人に対する印象も低く評価されるということである。

これは、会話行動が発言者同士の相互作用であり、発言抑制行動の行為者だけでなく、発言を抑制させる働きかけを行った他者の印象にも影響が及ぶと考えられるためである。

1.8 本論文の構成

最後に本論文の構成について示す。

本章においては、問題と目的について述べた。実験で得られたデータは 1 つであるが、そのデータを異なる 2 つの視点から検討する。そのため、結果を第 3 章から第 5 章の 3 つに分けて考察を行う。

第 2 章では本研究で行った実験の方法について述べる。

第 3 章では検討 I として評価対象者ごとの結果、考察について述べる。

第 4 章では検討 II として評価対象者全体、会話全体の結果、考察について述べる。

第 5 章では総合考察として第 3 章、第 4 章の内容を踏まえて総合考察を述べる。

第 6 章に引用・参考文献、第 7 章に資料を示す。

第2章 実験

2.1 目的

会話状況の違いで発言抑制行動に対する印象がどのように異なるかを明らかにするために実験を行う。その際に、発言抑制行動を行っている人と一緒に会話をしている人たちの印象や会話全体の印象についても測定し、相対的に比較検討する。

2.2 方法

対象者

M短期大学の短大生 85名（男性 19名・女性 66名） M大学の大学生 39名（男性 18名・女性 21名） N大学の大学生 27名（男性 5名・女性 22名）

実施時期

2012年12月 講義時間もしくは被験者の都合の良い時間を用いて実験を行った。講義教室のスクリーンや実験室の液晶ディスプレイに実験刺激を提示し、配布した質問紙に回答させた。

実験刺激について

実験前に実験刺激を作成した。刺激は発言者3名が会話をしている音声と静止画を合成したものである。会話は、実験者が事前に作成したシナリオに沿って行われた。

実験刺激は全部で4種類作成した。会話状況として、課題解決場面と日常会話場面の2種類、発言抑制の有り無しの2種類を組み合わせ、次の4つの条件となる。すなわち、[課題解決場面/発言抑制あり]、[課題解決場面/発言抑制なし]、[日常会話場面/発言抑制あり]、[日常会話場面/発言抑制なし]である。

課題解決場面は、授業での話し合い活動の雰囲気想定して「進路選択をする場合などにおいて文系と理系を分ける必要があるのか」というテーマについて議論を行っているシナリオを作成した。日常会話場面は、休み時間に友人同士が行う雑談の雰囲気想定して「ゼミ旅行の行先について」というテーマについて会話をしているシナリオを作成した。どちらも[抑制なし]条件のシナリオから、発言者Aのセリフを一部削除したものを[抑制あり]条件として使用した。削除した台詞は課題解決場面では相手の発言に対する否定的意見

であった。日常会話場面では、発言者 A の意見や会話を進行させる趣旨のものであった。

なお、発言者 B・C については、[抑制あり]条件、[抑制なし]条件ともに、全て同じ台詞とした。各条件とも、再生時間は 1 分前後になるようにした。

この会話状況を実験参加者に提示する方法として、先の会話状況を録音した音声を聞いてもらうわけであるが、ただ音声だけを流してしまうと、場合によっては 3 人のうち今誰が話をしているのかわからなくなる可能性が出てくるため、会話状況を画像で示すべく静止画像を作成した。なお、実験刺激作成の際に静止画を用いた理由は、2 つある。1 つは発言者が会話をしている映像を用いた際の会話時の視線・姿勢といった態度や外見などの視覚的な要素が印象評定に影響を排除するためである。2 つ目は音声は A・B・C 誰のものを被験者に知らせる目的である。

静止画は、3 人が向き合っているようなイラストを MicrosoftPowerPoint2010 を用いて作成した。円形や四角形を組み合わせた 3 つの人型（それぞれに A・B・C のアルファベットを付けたもの）と机に見立てた円形を配置した。また、流れている音声が発言者 A・B・C のうち誰のものなのかをわかりやすくするために、人型のうち 1 つだけの色を変えて、残る 2 つの人型の色を薄くしたものを A・B・C それぞれで作成した。各条件とも、静止画は全て同じものを使用した。

上記の音声と静止画を Windows ムービーメーカーを用いて組み合わせ、実験刺激とした。

シナリオの構成

実験刺激で録音された会話は、実験者があらかじめ作成したシナリオに基づき、発言者である 3 名の大学生(A・B・C)によって行われた。なお、発言者の性別については発言者 A が男性、B と C が女性であった。この 3 名は、同学年の同一講座に所属する実際の友人同士であった。

会話場面については、課題解決場面、日常会話場面ともに本研究で設定した特徴を含めたものにした。また、両方の場面に共通した設定として、発言者 A・B・C は友人同士ということ想定してシナリオを作成した。しかし、そのことが明言されている台詞はないため、実験実施の際には、教示として「3 人は友人同士である」という内容を伝えた。

課題解決場面は、あるテーマについて共通の見解を導くことを目的とした会話場面である。①ひとつのトピックに対してお互いに意見を出し合い結論を導くことを目的に進めて

いく。②話し手が自分の意見のある程度まとめて伝えるという会話パターンをとる。③比較的フォーマルな場面であり、議論をしている場面であるということを明確にするため、ですます調を用いて丁寧な口調で会話を行う。

本研究では「授業の話し合い場面」で「文系と理系を分離する必要があるのか」というテーマについて話し合いをしているという状況を設定した。

一方、日常会話場面は、コンサマトリー性の目標を持った会話場面である。つまり、会話そのものを楽しむ雑談を行うような条件である。①広く浅く、多様な情報について活発なやりとりが行われ、1回ずつの発言は短い。②話の内容が整理されたり意図的に展開されたりすることなく、その場の流れ次第でトピックが頻繁に変わっていくという会話パターンをとる。③比較的プライベートな場面であるためくだけた話し方で、平語を用いて会話を行う。

本研究では「休み時間」で「ゼミ旅行の行先について」話すという状況を設定した。

各会話場面で[抑制あり]条件と[抑制なし]条件を設定した。[抑制なし]条件での発言者Aの発言を半分程度にしたものを[抑制あり]条件とした。発言者Aの発言内容で、「良くわかりません」や「沖縄行きたい」などの『自分の意見の表出』をする状況や「でも、(中略)あまり関係ないんじゃないですか?」という『友人の態度や意見が間違っていると感じた』状況の発言を抑制(削除)した。なお、発言者Aの発言を削った後にも会話の辻褄が通るように配慮をして発言者Aおよび発言者B、発言者Cの発言内容を作成した。削られた発言のあった部分には空白時間をあけず、自然に次の発言をさせた。なお、作成したシナリオは以下に示す。発言者Aについては、[抑制あり]条件と[抑制なし]条件によって発言内容も異なるので、(抑制あり)・(抑制なし)で分けて記述する。

シナリオ 1 (課題解決場面) テーマ : 文系と理系に分ける必要はあるか

C: 文系と理系に分ける必要があるかどうかについて、どう思いますか??

A: (抑制あり) うーん…

(抑制なし) うーん、そうですね… よくわかりません。

B: 私は分けたほうがいいと思います。分けることによって、どちらにするかの選択のときに将来のことを考える機会が持てると思いますし。

C: そうですね…でも、文系・理系に分けてしまった後で進路変更をしようと思うと大変で、控えてしまうということがありますよね。

A: (抑制あり) 確かにそうですね。

(抑制なし) 確かにそうですね。でも、そんなに変更する人はいないのであまり関係ないんじゃないですか?

B: まあ、でも、分けなくて全ての教科を学ぶことになると、それぞれの教科の範囲が狭まりますよね? そのぶんも結局進学した先で学ばなくてはいけないので、結局同じような気がします。

C: 全教科を全範囲するのは無理ですよ… でも、進路を迷っている子も、とりあえずどちらかを選択しなければいけない、というのがなんだか納得いなくて…

B: 進路の先だって完全に文系か理系の2つに分けられるわけではないですもんね。もう少し他の選択肢というか、柔軟に対応できるような方法はないですかね…

A: あまり複雑にしまうと、逆効果になる気がします。でも、今でも、進路の専門性によっては、教科の選択のしかたが違ってきますよね。

C: あ、確かに。それに、進みたい先で、どの教科の知識が必要なのかによって、自然に分かれて行ってしまいますもんね。

B: では、受験制度の変更をしないと文系・理系をわけることも変更できないということですね。

C: じゃあ、どういう風に変えて行ったらいいんでしょうね…?

シナリオ2 (日常会話場面) テーマ: ゼミ旅行の行先を決める

C: 今度の連休、ゼミの旅行どこに行くー?

A: (抑制あり) うーん…

(抑制なし) うーん…どこに行こうか…?

B: 北海道に行きたい!!

C: あー、北海道いいね。だけど、私は沖縄に行きたいなー。

A: (抑制あり) いいね。

(抑制なし) いいね。沖縄行きたい!! 海に行きたい!!

B: たしかに沖縄いいかもねー 海きれいだもんね。

C: コテージで、安く泊まれるところあるみたいだよ!! 宿泊費安いと、買い物とか遊ぶのにお金かけれるよ!!

A: (抑制あり) 他にどこに行こうか??

(抑制なし) じゃあ行き先は沖縄にしよう。他にどこに行こうか??

C: あとは水族館にも行きたいな。大きい水族館あるもんね。

B: いいね。水族館好き!! 行こう!!

C: 水族館っていえば、大阪の海遊館も有名だよなー

B: うん、おっきい水槽あってすごいよね!!

A: (抑制あり) 水族館もいいけど動物園も行きたいな。

(抑制なし) 水族館もいいけど動物園も行きたいな。小さいころから行ってないもんなあ。

/

B: 私も全然動物園行ってないなー。そういえば北海道に旭山動物園…だっけ??話題になってたよね。

C: あー、旅行先、北海道でもいいなあ…

A: そうだね…迷うね…

C: 北海道行っておいしいもの食べるっていうのもいいよなあ…

手続き

実験は2種類の方法を用いて実施した。1つは講義時間での一斉実施で、もう1つは講義時間に被験者を募り、実験室に呼んで行った個別実施である。講義時間での一斉実施は85名、27名、19名ずつ計3回実施した。実験室での個別実施は1名で3回、2名で3回、11名で1回行った。

講義時間での実施は、それぞれ85名、27名、19名ずつ、一斉に行った。まず被験者に質問紙を配布してから実験の概要を説明した。

被験者に説明した実験の概要は、発言者A・B・Cという3名の登場する2種類の会話をそれぞれ4回ずつ提示するということ、そのうち1回目は全体把握するために、2~4回は発言者A・B・Cそれぞれの印象評定を行いながら視聴させるということである。また、実験の進行中、その都度質問紙のどのページに回答するのかは実験者が指定するというのも伝えた。

なお、85名の試行では、[日常会話場面/発言抑制あり]条件→[課題解決場面/発言抑制なし]条件の順に視聴させ(条件1)、それ以外の試行では[課題解決場面/発言抑制あり]条件→[日常会話場面/発言抑制なし]条件の順に視聴させた(条件2)。

実験の概要を説明した後、実験刺激を提示して適宜質問紙に回答をさせた。質問紙に回答させるために、刺激提示後に質問紙の回答のための時間として数分間設けた。1つ目の条件を4回提示して各回で発言者A・B・Cそれぞれの印象について質問紙の必要な部分に回答をさせた後に、会話全体の印象と発言者A・B・C3名の全体的な印象を尋ねる項目に回答をさせた。2つの条件を全て提示し、質問紙への回答が終了した時点で質問紙を回収し、実験を終了した。

質問紙の構成

I 発言者A・B・Cの印象①：特性形容詞尺度

特性形容詞尺度(林,1978)を用いて測定した。「会話を聞いてAさん(Bさん・Cさん)がどのような人だと思いましたか。」という教示文と提示した。下位尺度は「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」の3つであった。この尺度は「積極的な-消極的な」「人のわるい-人のよい」など20の形容詞対で構成されており、各項目7段階で評定させた。

II 発言者 A・B・C の印象②：ソーシャルスキル評定

ソーシャルスキル評定項目(田中・相川・小杉,2002)を用いて測定した。下位尺度は「非言語的行動」「自己表現に関わるスキル」「会話維持に関わるスキル」の3つであった。この尺度は「声の大きさは適当である」などの15項目で構成されていたが、本研究においては会話をしている映像は提示していないため、視覚的なことに関連する項目である姿勢「適度にリラックスした姿勢である」、表情「表情豊かである」、身振り「適当な身振りである」、視線「適度に相手を見て話している」の4項目は削除した。また、実験において使用した事前に作成したシナリオの評定においては不要と判断したため質問スキル「相手に質問をしている」の項目も削除した。「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」の4段階で評定させた。

III 会話全体の印象評定

会話に対する評価に関する質問項目(木村・余語・大坊,2005)を用いて測定した。など18項目で構成されていたが、視覚的な情報からの評価を求めるような文脈になっていたため、「うまく調整された会話だった」など、聴覚的な情報のみで評価できるように表現を一部改編した。「1.まったくそうでない」から「8.まったくそのとおりである」の8段階で評定させた。

IV 発言者 A・B・C の全体的な印象評定

発言者 A・B・C それぞれの全体的な印象を尋ねる項目1項目。「1.とても悪い」から「7.とても良い」の7段階で評定させた。

上記の I~IV で質問紙は構成された。I と II の項目は教示文を一部変えて、評定対象である発言者 A・B・C それぞれについて尋ねた。実験では AI・AII・BI・BII・CI・CII・III・IV の構成を2回提示して、2種類の会話場面とも同様の質問項目に回答させた。

第3章 検討 I

第3章では、評価対象者それぞれの結果について述べる。各変数の記述統計量と、各変数で発言者 A・B・C それぞれについて会話場面ごとの比較や、抑制の有無による比較を記載する。

3.1 各変数の記述統計量

分析対象者

調査対象者 150 名（男性 42 名・女性 108 名）を分析対象とした。

各変数の記述統計量

ソーシャルスキル、会話に対する印象、発言者 A・B・C の全体的な印象の得点について平均値と標準偏差を算出した。全ての条件を総合した得点を算出したものを Table3-1 に示す。会話条件ごとに得点を算出したものを Table3-2、Table3-3 に示す。

項目の一部を削除したソーシャルスキル尺度と項目の表記を一部改編した会話に対する評価に関する質問項目の内的整合性を検討するために条件ごとに各尺度の Cronbach の α 係数を算出した。評定対象が発言者 A・B・C の 3 名いるため、ソーシャルスキル尺度に関しては評定対象者ごとに算出した。課題解決場面では発言者 A で $\alpha=.653$ 、発言者 B で $\alpha=.784$ 、発言者 C で $\alpha=.802$ であった。日常会話場面では発言者 A で $\alpha=.810$ 、発言者 B で $\alpha=.821$ 、発言者 C で $\alpha=.663$ であった。会話に対する評価に関する質問項目については、課題解決場面で $\alpha=.900$ 、日常会話場面で $\alpha=.898$ であった。一部、 α 係数が低い項目もあったが、概ね高い値が得られたためこれらの項目を分析に使用した。

特性形容詞尺度について、条件別に発言者 A・B・C それぞれの平均値と標準偏差を算出した。(Table3-4, Table3-5) その中で、発言者 A の各会話場面の[抑制あり条件]と[抑制なし条件]の平均値の比較を Figure3-1 および Figure3-2 に示す。また、各会話場面について条件ごとの発言者 A・B・C の平均値の比較を Figure3-3 から Figure3-6 に示す。発言者 B と発言者 C の各会話場面の[抑制あり条件]と[抑制なし条件]の平均値の比較については、条件間で全ての項目においてほぼ近似した値であったため、図としては掲載しない。

発言者 A の課題解決場面における特性形容詞尺度得点の平均値の比較(Figure3-1)を、行ったところ、[抑制あり条件]と[抑制なし条件]の間に多少の差はあるが、得点分布の傾向が

近い項目が多く見られた。今回の実験操作では抑制の有無に関わらずほとんどの項目において似たような印象が形成されていた。「消極的な」「非社会的な」「沈んだ」「親しみにくい」といった項目が特に強く評価されていた。

発言者 A の日常会話場面における特性形容詞尺度得点の平均値の比較(Figure3-2)を行ったところ、課題解決場面に比べると得点分布の傾向が近い項目は少なく、条件間で平均値に差が生じた項目が約半数であった。日常会話場面においては、課題解決場面よりも発言抑制行動の有無という条件差で、異なった印象が形成されていたといえる。特に「積極的な・消極的な」「非社会的な・社会的な」「沈んだ・うきうきした」「親しみやすい・親しみにくい」「無気力な・意欲的な」などの項目では、[抑制あり条件]と[抑制なし条件]の間で平均値に差が見られた。[抑制あり条件]ではそれぞれの項目のネガティブ側に、[抑制なし条件]では、それぞれの項目のポジティブ側に評価されていた。

Table3-1 各得点の平均値・標準偏差

	全体		抑制あり		抑制なし	
	M	SD	M	SD	M	SD
社会的スキル						
発言者 A	25.57	6.14	23.87	5.73	27.63	5.90
発言者 B	33.22	6.52	33.53	6.08	32.96	6.92
発言者 C	32.97	5.15	32.65	4.65	33.46	5.61
会話に対する評価	90.95	20.32	86.45	17.55	96.06	22.12
全体の印象						
発言者 A	3.92	1.34	3.75	1.33	4.14	1.34
発言者 B	5.27	1.24	5.15	1.33	5.39	1.15
発言者 C	4.63	1.39	4.57	1.45	4.73	1.32

Table3-2 課題解決場面における各得点の平均値・標準偏差

課題解決場面	全体			抑制あり			抑制なし		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
社会的スキル									
発言者 A	147	24.82	3.94	65	24.75	3.60	82	24.88	4.21
発言者 B	148	32.70	4.02	66	33.23	3.22	82	32.28	4.54
発言者 C	148	33.21	4.27	66	33.59	3.69	82	32.91	4.69
会話に対する評価	146	92.43	15.58	66	89.85	16.13	80	94.56	14.88
全体の印象									
発言者 A	150	3.80	1.29	66	3.79	1.36	84	3.81	1.24
発言者 B	150	5.05	1.34	66	4.91	1.51	84	5.15	1.19
発言者 C	150	5.23	1.14	66	5.32	1.19	84	5.17	1.10

Table3-3 日常会話場面における各得点の平均値・標準偏差

日常会話場面	全体			抑制あり			抑制なし		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
社会的スキル									
発言者 A	146	26.32	5.49	80	22.98	3.91	66	30.38	4.25
発言者 B	145	33.74	4.32	81	33.83	4.33	64	33.64	4.35
発言者 C	149	32.72	3.68	83	31.71	3.75	66	34.00	3.20
会話に対する評価	149	89.47	17.81	83	83.04	15.59	66	97.56	17.21
全体の印象									
発言者 A	150	4.04	1.39	84	3.70	1.31	66	4.47	1.38
発言者 B	150	5.49	1.10	84	5.38	1.14	66	5.62	1.05
発言者 C	150	4.03	1.36	84	3.82	1.28	66	4.29	1.42

Table3-4 課題解決場面における特性形容詞尺度の平均値・標準偏差

	発言者A				発言者B				発言者C			
	抑制あり		抑制なし		抑制あり		抑制なし		抑制あり		抑制なし	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1. 積極的な-消極的な	3.83	1.30	4.68	1.52	2.26	1.17	1.95	0.82	1.67	1.10	2.40	1.67
2. 人のわるい-人のよい	4.91	1.12	3.66	1.10	5.64	1.00	5.18	1.18	4.58	1.52	5.11	1.09
3. なまいきでない-なまいきな	3.30	1.35	4.68	1.30	3.05	1.48	3.13	1.21	4.64	1.49	3.60	1.32
4. ひとなつこい-近づきたい	3.67	1.27	4.85	1.14	2.29	1.09	3.14	1.09	3.53	1.29	3.55	1.20
5. にくらしい-かわいらしい	4.29	1.20	3.50	0.96	5.38	1.16	4.83	1.06	3.88	1.22	4.35	0.93
6. 心のひろい-心のせまい	3.32	1.25	4.62	1.05	2.61	1.11	3.31	1.12	3.91	1.32	3.24	1.12
7. 非社会的な-社会的な	4.47	1.21	3.35	1.40	5.67	1.04	5.43	1.12	5.61	1.24	5.71	1.14
8. 責任感のある-責任感のない	4.88	1.26	4.77	1.34	3.97	1.05	3.06	1.05	3.65	1.56	2.88	1.28
9. 軽率な-慎重な	3.39	1.26	3.70	1.50	3.92	1.22	4.64	1.02	3.36	1.34	4.89	1.20
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	3.88	1.02	3.93	0.88	3.79	1.03	3.64	0.79	3.15	0.98	3.59	0.91
11. 重厚な-軽薄な	4.88	1.10	4.30	1.18	4.52	1.06	3.62	0.98	4.71	1.30	3.47	1.11
12. 沈んだ-うきうきした	4.65	1.27	3.28	1.00	5.64	1.03	4.69	1.06	6.03	0.94	4.61	0.91
13. 堂々とした-卑屈な	3.68	0.93	4.10	1.40	3.05	0.98	2.76	1.21	2.32	1.05	2.64	1.36
14. 感じの悪い-感じのよい	4.48	1.18	3.18	1.14	5.59	0.96	5.02	1.19	4.41	1.47	5.07	1.15
15. 分別のある-無分別な	3.94	1.16	3.96	0.92	3.39	1.11	3.15	1.07	3.94	1.46	3.46	1.26
16. 親しみやすい-親みにくい	3.71	1.38	4.94	1.22	2.42	1.12	2.92	1.22	3.52	1.30	3.35	1.15
17. 無気力な-意欲的な	4.00	1.39	3.15	1.47	5.79	1.06	5.80	1.15	6.02	0.87	5.73	1.03
18. 自信のない-自信のある	3.85	0.96	4.04	1.29	4.59	1.32	5.23	1.21	5.35	1.18	5.23	1.34
19. 気長な-短気な	3.33	1.18	3.94	1.03	3.00	1.31	3.61	1.02	4.17	1.09	3.46	1.15
20. 不親切な-親切な	4.24	1.28	3.65	1.04	5.26	1.04	4.81	1.08	4.20	1.19	5.09	1.14

Table3-5 日常会話場面における特性形容詞尺度の平均値・標準偏差

	発言者A				発言者B				発言者C			
	抑制あり		抑制なし		抑制あり		抑制なし		抑制あり		抑制なし	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1. 積極的な-消極的な	5.38	1.16	5.47	1.04	2.09	1.07	1.61	0.93	1.64	1.40	2.09	1.20
2. 人のわるい-人のよい	4.30	1.13	4.05	1.18	5.62	1.04	5.11	1.07	4.60	1.40	5.42	1.05
3. なまいきでない-なまいきな	3.57	1.45	3.80	1.50	2.71	1.18	3.94	1.42	4.49	1.49	3.44	1.48
4. ひとなつこい-近づきたい	5.10	1.21	4.82	1.12	2.47	1.05	3.34	1.11	3.18	1.47	3.67	1.24
5. にくらしい-かわいらしい	3.88	1.05	3.46	0.92	5.31	1.14	4.43	1.00	3.76	1.01	4.30	0.89
6. 心のひろい-心のせまい	3.78	1.11	4.08	1.11	2.68	1.13	3.66	1.08	4.01	1.34	3.22	1.18
7. 非社交的な-社交的な	3.11	1.35	3.03	1.16	5.60	1.15	5.92	0.83	5.94	1.21	5.82	1.04
8. 責任感のある-責任感のない	4.90	1.19	4.55	1.20	3.73	1.02	3.14	1.43	3.80	1.57	2.48	1.38
9. 軽率な-慎重な	4.04	1.32	5.17	1.25	3.67	1.19	4.12	1.10	3.04	1.20	5.45	1.01
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	4.52	1.09	4.50	1.24	3.74	0.79	3.33	0.77	2.89	1.09	3.59	0.74
11. 重厚な-軽薄な	4.09	1.29	3.47	1.21	4.33	1.08	3.97	1.21	4.90	1.19	3.11	1.08
12. 沈んだ-うきうきした	2.68	1.08	2.82	0.88	5.69	1.08	4.98	0.83	5.99	1.04	4.05	1.13
13. 堂々とした-卑屈な	4.54	1.11	4.32	1.16	3.22	1.17	2.21	0.90	2.27	1.41	2.57	1.25
14. 感じの悪い-感じのよい	3.36	1.08	3.47	1.11	5.68	1.09	5.12	1.25	4.34	1.44	5.06	1.30
15. 分別のある-無分別な	4.12	1.00	3.33	1.01	3.68	1.17	3.21	1.13	4.24	1.30	2.53	1.06
16. 親しみやすい-親みにくい	5.22	1.22	5.15	1.27	2.41	1.47	3.14	1.40	3.37	1.63	3.33	1.52
17. 無気力な-意欲的な	2.36	0.99	3.14	1.28	5.57	1.21	6.32	0.66	6.06	1.27	5.83	1.25
18. 自信のない-自信のある	3.11	1.11	3.83	1.35	4.83	1.17	5.89	0.90	5.92	1.43	5.17	1.39
19. 気長な-短気な	3.44	1.25	3.32	1.05	3.14	1.08	3.94	1.05	4.61	1.34	3.20	1.22
20. 不親切な-親切な	3.78	1.08	3.72	1.07	5.12	1.05	4.83	0.92	4.29	1.28	5.14	1.19

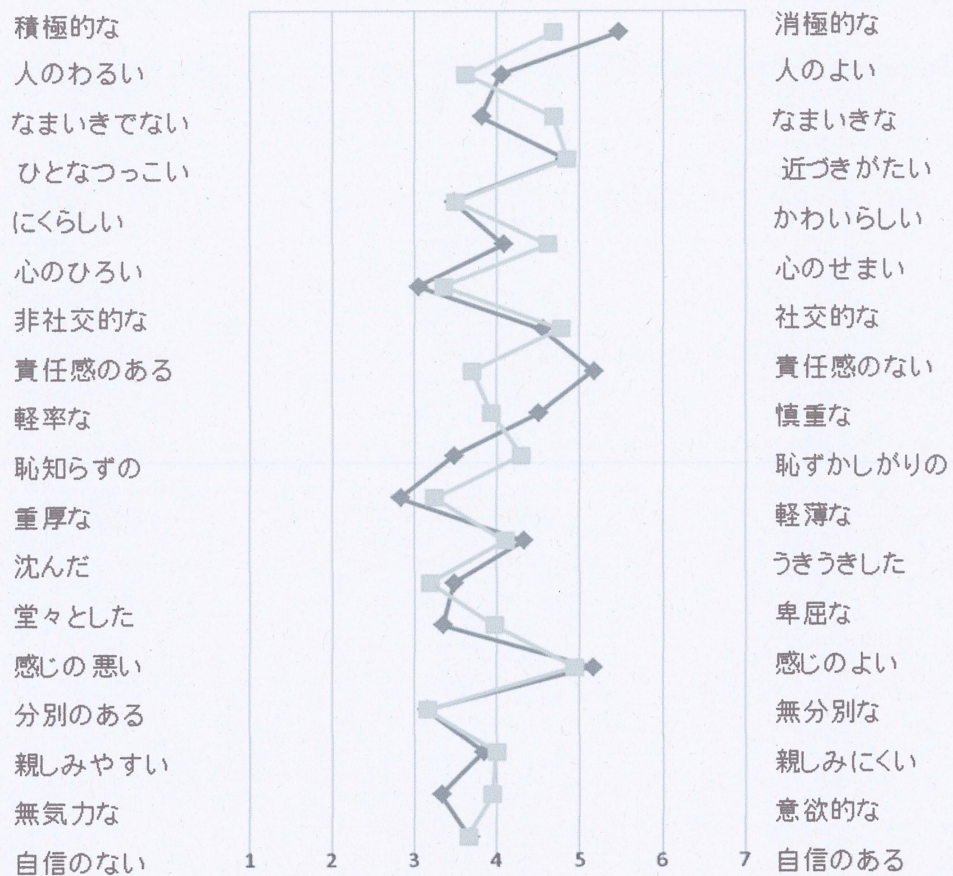
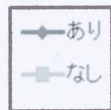


Figure3-1 発言者Aの特性形容詞尺度得点の平均点の比較(課題解決場面)



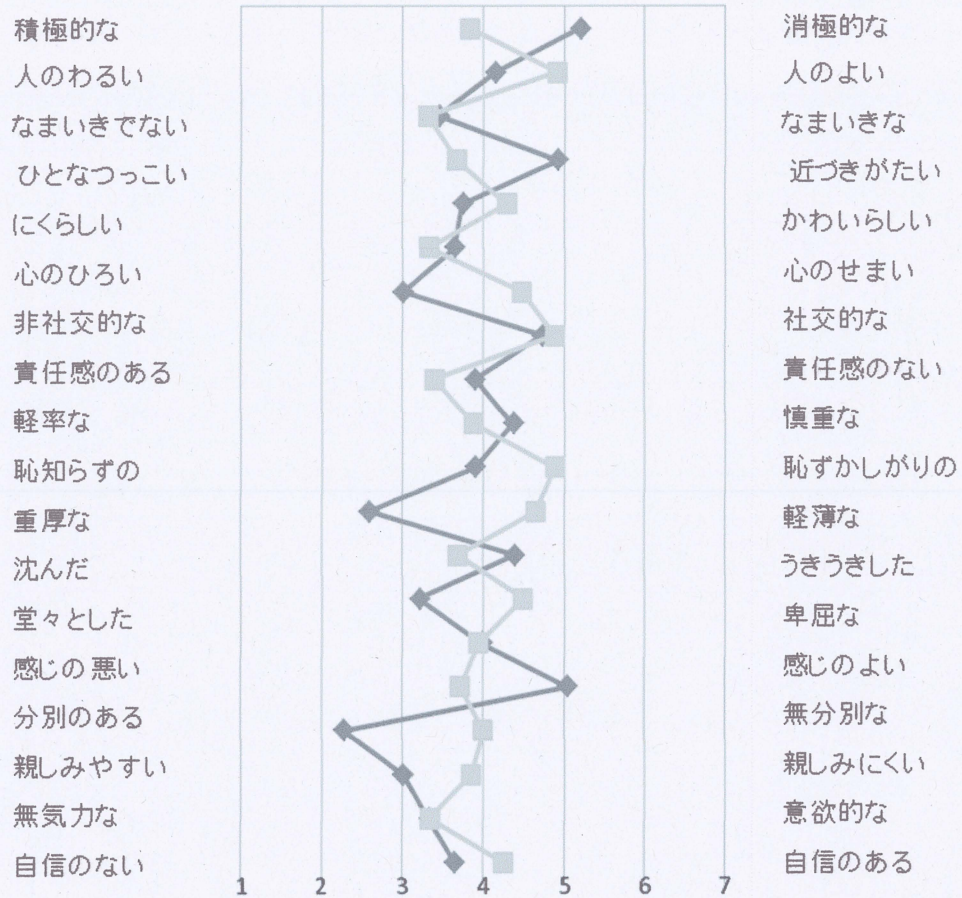
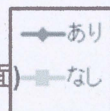


Figure3-2 発言者Aの特性形容詞尺度得点の平均点の比較(日常会話場面)



3.2 会話の発言者 A・B・C の特性形容詞尺度の結果について

本研究で使用した特性形容詞尺度は、大橋ら(1973)・林(1978)によって対人認知構造の基本的三次元として「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」、「活動性」の3因子が抽出されている。これらの研究では容姿という視覚的な刺激による印象評定にこの尺度を用いているが、本研究においては会話をしている映像などの視覚的な情報は与えず、音声という聴覚的な刺激のみで印象評定を行ったため、上に挙げた諸研究とは異なる因子構造をとる可能性がある。また、基本的三次元のどの次元が強く影響するのかということを確認する必要があるとも考えられる。

そこで、発言者 A・B・C について各会話場面の[抑制あり条件]と[発言抑制なし条件]の2条件でそれぞれ因子分析(主因子法 バリマックス回転)を行った。

3.2.1 課題解決場面における発言者 A の印象について

課題解決場面において発言者 A について因子分析を行った結果、[抑制あり条件]では4因子、[抑制なし条件]では5因子を抽出した(Table3-6, Table3-7)。

[抑制あり条件]において第1因子は「人のわるい・人のよい」など10項目で構成された。第2因子は「沈んだ・うきうきした」など4項目で構成された。第3因子は「重厚な・軽薄な」など4項目で構成された。第4因子は「自信のない・自信のある」、「恥知らずの・恥ずかしがりの」の2項目で構成された。第1因子に入ってきた項目の大半は、林(1978)の基本3次元のうち「個人的親しみやすさ」次元に対応する項目であった。そこに「社会的望ましさ」「活動性」次元の項目が加わって構成されていた。また、第2因子と第4因子が「活動性」次元に、第3因子が「社会的望ましさ」次元にそれぞれ対応した因子構造となった。この条件においては、個人的な親しみやすさを重要な要素として印象形成されているということが明らかになった。

改めて各因子を構成している項目を見てみると、第2因子はポジティブな項目で構成されていたが、第1因子と第3因子と第4因子はネガティブな項目で構成されていた。そのため、[抑制あり条件]においては発言者 A の印象は比較的ネガティブなものであったと考えられる。

次に[抑制なし条件]において第1因子は「にくらしい・かわいらしい」など5項目で構成された。第2因子は「自信のない・自信のある」など3項目で構成された。第3因子は「重厚な・軽薄な」など4項目で構成された。第4因子は「心のひろい・心のせまい」など4項

目で構成された。第5因子は「堂々とした」など4項目で構成された。林の基本的3次元に照らしてみると、第1因子は「個人的親しみやすさ」を主とするも、他の次元も混在した構成になった。また、第2因子と第5因子が「活動性」に、第3因子が「社会的望ましさ」に、第4因子が「個人的親しみやすさ」に対応した因子構造となった。この条件においても、個人的親しみやすさ次元が強く影響を及ぼしているが、[抑制あり条件]に比べると活動性次元や社会的望ましさ次元も重要な要素として印象が形成されていることが明らかになった。

なお第1因子と第2因子はポジティブな項目で構成されていた。第3因子以降はネガティブな項目で構成されていた。この因子分析では寄与率が56%であり、第1因子と第2因子でそのうちの約半分の寄与率が得られている。そのそのため、[抑制なし条件]においては発言者Aの印象は比較的ポジティブであったと考えられる。

Table3-6 課題解決場面(抑制あり)における発言者Aの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
2. 人のわるい-人のよい	-.829	.110	-.096	.141	.728
16. 親しみやすい-親みにくい	.803	-.426	-.064	.080	.838
6. 心のひろい-心のせまい	.739	-.008	-.088	-.136	.573
14. 感じの悪い-感じのよい	-.708	.267	-.197	.073	.617
3. なまいきでない-なまいきな	.701	-.071	.171	-.095	.535
20. 不親切な-親切な	-.676	.136	-.243	-.029	.536
19. 気長な-短気な	.653	.157	.143	-.073	.477
4. ひとなつっこい-近づきたい	.594	-.419	.040	.111	.542
17. 無気力な-意欲的な	-.509	.383	-.053	-.486	.644
13. 堂々とした-卑屈な	.412	-.226	.395	.268	.449
12. 沈んだ-うきうきした	-.093	.801	.147	.012	.671
7. 非社交的な-社交的な	-.272	.672	-.152	-.158	.574
5. にくらしい-かわいらしい	-.422	.555	-.009	.404	.649
1. 積極的な-消極的な	-.068	-.477	.231	.172	.315
11. 重厚な-軽薄な	-.107	.019	.767	-.021	.601
15. 分別のある-無分別な	.496	.006	.600	.100	.616
8. 責任感のある-責任感のない	.180	-.396	.588	.163	.561
9. 軽率な-慎重な	-.140	-.004	-.524	-.004	.295
18. 自信のない-自信のある	.104	.016	-.210	-.733	.592
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	-.258	-.269	-.212	.442	.379
因子寄与	5.188	2.545	2.086	1.372	11.191
寄与率(%)	25.940	12.723	10.429	6.861	55.953
累積寄与率	25.940	38.663	49.092	55.953	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table3-7 課題解決場面(抑制なし)における発言者Aの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	5	共通性
5. にくらしい-かわいらしい	.825	.072	-.037	.007	.029	.689
14. 感じの悪い-感じのよい	.689	.383	.090	-.275	.123	.721
7. 非社交的な-社交的な	.684	.151	-.063	.010	-.055	.498
2. 人のわるい-人のよい	.667	.046	-.162	-.108	.036	.486
17. 無気力な-意欲的な	.614	.579	-.148	.003	-.207	.777
18. 自信のない-自信のある	.038	.722	-.129	.082	.055	.549
12. 沈んだ-うきうきした	.184	.621	-.003	.126	-.211	.480
20. 不親切な-親切な	.367	.589	-.017	-.134	.238	.557
11. 重厚な-軽薄な	-.151	.018	.781	.257	.058	.702
8. 責任感のある-責任感のない	-.176	-.004	.682	.149	.446	.717
9. 軽率な-慎重な	.180	.370	-.649	.265	.123	.676
15. 分別のある-無分別な	.179	-.085	.505	.264	.094	.373
6. 心のひろい-心のせまい	-.362	.279	.230	.675	.107	.729
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.180	-.351	.053	.584	.324	.604
19. 気長な-短気な	.365	-.024	.113	.582	-.024	.486
3. なまいきでない-なまいきな	-.217	.283	.181	.483	.116	.407
13. 堂々とした-卑屈な	.008	-.246	.242	.011	.649	.540
1. 積極的な-消極的な	-.191	.167	.390	.177	.537	.536
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.227	.057	-.122	.076	.514	.340
4. ひとなつっこい-近づきたい	-.097	.057	.099	.407	.448	.388
因子寄与	3.175	2.287	2.166	1.928	1.699	11.191
寄与率 (%)	15.877	11.437	10.831	9.639	8.495	56.279
累積寄与率	15.877	27.314	38.145	47.784	56.279	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

3.2.2 日常会話場面における発言者 A の印象について

日常会話場面における発言者 A の印象について因子分析を行った(Table3-8,Table3-9)。
[抑制あり条件]では負荷量の低い項目があったため、それらの項目を削除した後に再分析をした結果、4 因子を抽出した。[抑制なし条件]でも 4 因子を抽出した。

[抑制あり条件]では、第 1 因子は「積極的な・消極的な」など 7 項目で構成された。第 2 因子は「不親切な・親切な」など 7 項目で構成された。第 3 因子は「なまいきでないなまいきな」など 3 項目で構成された。第 4 因子は「重厚な・軽薄な」、「軽率な・慎重な」の 2 項目で構成された。

基本的 3 次元に照らしてみると、第 1 因子は「活動性」に、第 2 因子、第 3 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 4 因子は「社会的望ましさ」に対応した因子構造となっていた。この条件においては、「活動性」が重要な要素として認識されているということである。

各因子を構成している項目を見ると、第 1 因子はネガティブな項目で構成されていた。それ以外の因子はポジティブな項目で構成されていた。そのため、今回の因子分析の結果からは[抑制あり条件]においては発言者 A の印象は比較的ポジティブであったと考えられる。

[抑制なし条件]では、第 1 因子は「心のひろい・心のせまい」など 9 項目で構成された。第 2 因子は「無気力な・意欲的な」など 5 項目で構成された。第 3 因子は「軽率な・慎重な」など 4 項目で構成された。第 4 因子は「心のひろい・心のせまい」など 3 項目で構成された。第 5 因子では「堂々とした・卑屈な」など 2 項目で構成された。この因子分析結果においても、第 1 因子、第 4 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 3 因子は「社会的望ましさ」に、第 5 因子は「活動性」にそれぞれ対応する因子構造となった。第 2 因子については、「活動性」を主として、他の次元が混在する因子構造となった。この条件においては、「個人的親しみやすさ」が重要な要素として認識されているということである。

各因子を構成している項目を見ると、第 1 因子、第 3 因子、第 4 因子はネガティブな項目で構成されていた。第 2 因子はポジティブな項目で構成されていた。そのため、今回の因子分析の結果からは[抑制なし条件]における発言者 A の印象は比較的ネガティブであったと考えられる。

Table3-8 日常会話場面(抑制あり)における発言者Aの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
1. 積極的な-消極的な	.734	-.081	.010	.030	.546
13. 堂々とした-卑屈な	.647	-.027	-.139	-.126	.454
12. 沈んだ-うきうきした	-.614	.186	.264	.123	.496
17. 無気力な-意欲的な	-.558	.318	.068	.436	.608
7. 非社交的な-社交的な	-.532	.153	.222	-.154	.379
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.466	.038	.254	.390	.436
18. 自信のない-自信のある	-.421	-.015	-.128	-.030	.195
20. 不親切な-親切な	-.126	.639	.336	.103	.547
19. 気長な-短気な	-.210	-.620	-.212	-.067	.478
14. 感じの悪い-感じのよい	-.188	.597	.301	.196	.521
16. 親しみやすい-親しみにくい	.366	-.559	-.005	.062	.450
5. にくらしい-かわいらしい	-.016	.536	.140	.028	.307
4. ひとなつこい-近づきがたい	.429	-.525	-.187	-.029	.496
15. 分別のある-無分別な	.231	-.359	-.094	-.291	.275
3. なまいきでない-なまいきな	.039	-.219	-.692	-.173	.559
6. 心のひろい-心のせまい	.192	-.303	-.644	-.114	.556
2. 人のわるい-人のよい	.045	.422	.627	-.073	.579
11. 重厚な-軽薄な	-.035	-.017	-.074	-.744	.560
9. 軽率な-慎重な	-.002	.092	.036	.705	.507
因子寄与	2.830	2.648	1.830	1.640	8.949
寄与率(%)	14.897	13.939	9.631	8.632	47.100
累積寄与率	14.897	28.837	38.468	47.100	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table3-9 日常会話場面(抑制なし)における発言者Aの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
6. 心のひろい-心のせまい	.808	-.029	.038	-.138	.675
2. 人のわるい-人のよい	-.767	.284	.003	-.057	.673
3. なまいきでない-なまいきな	.744	.017	.211	.322	.701
14. 感じの悪い-感じのよい	-.743	.386	-.240	-.223	.809
5. にくらしい-かわいらしい	-.681	.155	-.025	-.023	.489
19. 気長な-短気な	.660	.189	.122	-.301	.576
20. 不親切な-親切な	-.615	.231	-.371	-.209	.612
4. ひとなつつこい-近づきたい	.600	-.493	-.166	.084	.638
16. 親しみやすい-親しみにくい	.551	-.524	.157	.308	.698
17. 無気力な-意欲的な	-.174	.729	-.189	.146	.619
18. 自信のない-自信のある	.006	.680	-.045	-.153	.489
1. 積極的な-消極的な	.033	-.658	.114	.280	.526
7. 非社交的な-社交的な	-.332	.573	.135	-.213	.503
12. 沈んだ-うきうきした	-.469	.502	.163	-.326	.604
9. 軽率な-慎重な	.024	.123	-.747	.398	.732
11. 重厚な-軽薄な	.025	.138	.746	-.045	.578
8. 責任感のある-責任感のない	.175	-.385	.738	.059	.727
15. 分別のある-無分別な	.363	-.050	.442	.242	.389
13. 堂々とした-卑屈な	.209	-.380	.006	.572	.516
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	-.153	-.312	-.385	.553	.575
因子寄与	4.880	3.297	2.408	1.542	12.128
寄与率 (%)	24.402	16.487	12.038	7.712	60.639
累積寄与率	24.402	40.889	52.927	60.639	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

3.2.3 発言者 A の印象についての会話場面間の比較

課題解決場面の[抑制あり条件]と[抑制なし条件]と日常会話場面の[抑制なし条件]は、いずれも「個人的親しみやすさ」次元に対応した項目の負荷が高かったのに対して、日常会話場面の[抑制あり条件]においては「活動性」次元に対応した項目の負荷が高い因子構造となった。このことから印象形成の際に重視される次元が条件によって異なることが明らかになった。

また、各条件の構成因子を見ると、ネガティブな側面に負荷の高いもの、ポジティブな側面に負荷の高いもの、両方の側面に負荷が高いものがあった。発言をおこなっていたのは同一の人物であるのに、条件間で評定される印象が異なっていた。よって本研究で行った実験において、会話場面間、抑制の有無などの条件の違いによって、異なる印象を与えることができたと考えられる。

3.2.4 課題解決場面における発言者 B の印象について

課題解決場面において発言者 B について因子分析を行った(Table3-10,Table3-11)。**[抑制あり条件]**では 4 因子を抽出した。**[抑制なし条件]**では負荷量の低い項目があったため、削除後に再分析の結果 5 因子を抽出した。

[抑制あり条件]では、第 1 因子は「不親切な・親切な」など 9 項目で構成された。第 2 因子は「軽率な・慎重な」など 4 項目で構成された。第 3 因子は「無気力な・意欲的な」など 5 項目で構成された。第 4 因子は「自信のない・自信のある」など 2 項目で構成された。

基本的三次元に対応させると、第 1 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 2 因子は「社会的望ましさ」に、第 3 因子、第 4 因子は「活動性」に完全に対応した因子構造となった。この条件においても、「個人的親しみやすさ」の次元が重要視されていた。

[抑制なし条件]では、第 1 因子は「にくりしい・かわいらしい」など 7 項目で構成された。第 2 因子は「重厚な・軽薄な」など 4 項目で構成された。第 3 因子は「自信のない・自信のある」など 2 項目で構成された。第 4 因子は「積極的な・消極的な」など 3 項目で構成された。第 5 因子では「親しみやすい・親しみにくい」など 3 項目で構成された。この因子分析結果においては、第 1 因子と第 5 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 2 因子は「社会的望ましさ」に、第 3 因子、第 4 因子は「活動性」にそれぞれ対応する因子構造となった。

条件ごとに、因子構造は異なったが、因子を構成する項目は抑制あり、抑制なしで類似

していた。[抑制あり条件]の第1因子の項目の一部が[抑制なし条件]では第5因子として構成されたが、それ以外の項目については、ほぼ同じ構成となっていた。

Table3-10 課題解決場面(抑制あり)における発言者Bの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
20. 不親切な-親切な	.777	-.205	.041	.031	.649
5. にくらしい-かわいらしい	.744	.020	.172	.019	.583
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.735	-.285	-.125	-.043	.639
14. 感じの悪い-感じのよい	.711	-.188	.263	-.028	.610
2. 人のわるい-人のよい	.656	-.253	.322	-.114	.612
19. 気長な-短気な	-.552	.297	.055	.003	.395
6. 心のひろい-心のせまい	-.541	.103	-.048	-.097	.315
4. ひとなつつこい-近づきがたい	-.526	-.284	-.274	-.027	.434
3. なまいきでない-なまいきな	-.521	.239	-.022	.230	.382
9. 軽率な-慎重な	.190	-.852	-.121	.069	.782
11. 重厚な-軽薄な	-.026	.608	-.069	-.010	.375
15. 分別のある-無分別な	-.439	.553	.005	-.415	.671
8. 責任感のある-責任感のない	-.105	.487	-.060	.115	.265
17. 無気力な-意欲的な	.119	-.102	.805	.307	.767
1. 積極的な-消極的な	-.089	-.095	-.669	.040	.466
7. 非社交的な-社交的な	.325	-.189	.638	.108	.561
13. 堂々とした-卑屈な	.114	.539	-.582	-.259	.710
12. 沈んだ-うきうきした	.280	.121	.431	.082	.285
18. 自信のない-自信のある	-.074	-.190	.319	.543	.438
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	-.015	-.085	-.064	-.466	.229
因子寄与	4.243	2.502	2.458	.964	10.167
寄与率 (%)	21.217	12.512	12.291	4.819	50.840
累積寄与率	21.217	33.730	46.020	50.840	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table3-11 課題解決場面(抑制なし)における発言者Bの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	5	共通性
5. にくらしい-かわいらしい	.712	.097	.266	-.111	.436	.789
6. 心のひろい-心のせまい	-.652	.226	-.269	.163	-.102	.585
20. 不親切な-親切な	.629	.056	.108	.033	.115	.425
2. 人のわるい-人のよい	.615	-.054	.203	-.148	.325	.550
4. ひとなつこい-近づきがたい	-.545	.096	-.099	.210	-.076	.366
7. 非社交的な-社交的な	.537	.226	.318	-.358	.099	.578
3. なまいきでない-なまいきな	-.529	.302	-.022	.128	-.233	.442
11. 重厚な-軽薄な	-.028	.715	.270	-.139	-.008	.605
9. 軽率な-慎重な	.034	-.651	.100	.186	.031	.470
8. 責任感のある-責任感のない	-.215	.526	-.280	.049	.141	.424
10. 恥知らずの-恥ずかしがり	-.187	-.518	-.415	.155	.265	.570
18. 自信のない-自信のある	.236	-.051	.619	-.038	.140	.463
13. 堂々とした-卑屈な	-.173	-.061	-.597	.337	-.186	.539
1. 積極的な-消極的な	-.138	-.161	-.126	.811	-.010	.719
12. 沈んだ-うきうきした	.498	.362	.214	-.514	.184	.723
17. 無気力な-意欲的な	.438	.296	.323	-.500	.182	.666
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.318	-.106	-.181	.175	-.629	.571
14. 感じの悪い-感じのよい	.403	.023	.384	-.194	.535	.633
19. 気長な-短気な	-.280	.229	.031	-.155	-.400	.316
因子寄与	3.540	2.013	1.728	1.711	1.443	10.434
寄与率 (%)	18.633	10.593	9.093	9.005	7.593	54.918
累積寄与率	18.633	29.226	38.319	47.325	54.918	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うハリマックス法

3.2.5 日常会話場面における発言者 B の印象について

日常会話場面において発言者 B について因子分析を行った(Table3-12,Table3-13)。**[抑制あり条件]**では 因子を抽出した。**[抑制なし条件]**では負荷量の低い3項目を削除した後、再度分析を行い3因子を抽出した。

[抑制あり条件]では、第1因子は「にくらしい・かわいらしい」など11項目で構成された。第2因子は「恥知らずの・恥ずかしがりの」など7項目で構成された。第3因子は「責任感のある・責任感のない」など2項目で構成された。

基本的三次元に対応させると、第1因子は「個人的親しみやすさ」に、第2因子は「活動性」に、第3因子は「社会的望ましさ」に対応した因子構造となった。

[抑制なし条件]では、第1因子は「人のわるい・人のよい」など9項目で構成された。第2因子は「沈んだ・うきうきした」など5項目で構成された。第3因子は「分別のある・分別のない」など4項目で構成された。第4因子は「恥知らずの・恥ずかしがりの」など2項目で構成された。この因子分析結果においては、第1因子は「個人的親しみやすさ」第2因子と第4因子は「活動性」に、第3因子は「社会的望ましさ」に対応した因子構造となった。

この会話条件においても、因子内での負荷量の違いはあるものの抑制の有無で比較しても類似した因子構造をとっていた。

Table3-12 日常会話場面(抑制あり)における発言者Bの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	共通性
5. にくらしい-かわいらしい	.839	.266	-.019	.775
2. 人のわるい-人のよい	.702	.190	-.136	.547
14. 感じの悪い-感じのよい	.681	.267	-.038	.536
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.647	-.159	-.127	.460
6. 心のひろい-心のせまい	-.602	-.213	.372	.546
3. なまいきでない-なまいきな	-.569	.034	.273	.399
20. 不親切な-親切な	.533	.157	-.095	.317
19. 気長な-短気な	-.492	.299	.060	.335
4. ひとなつつこい-近づきがたい	-.473	-.209	.211	.312
18. 自信のない-自信のある	.336	.311	-.224	.260
15. 分別のある-無分別な	-.247	-.173	.114	.104
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.014	-.655	-.115	.443
17. 無気力な-意欲的な	.487	.651	.064	.665
12. 沈んだ-うきうきした	.512	.643	.131	.693
1. 積極的な-消極的な	-.184	-.582	-.023	.373
7. 非社交的な-社交的な	.494	.573	-.037	.574
11. 重厚な-軽薄な	-.042	.571	.455	.536
13. 堂々とした-卑屈な	-.324	-.533	.168	.417
8. 責任感のある-責任感のない	-.117	-.022	.676	.471
9. 軽率な-慎重な	.090	-.365	-.569	.465
因子寄与	4.594	3.212	1.422	9.227
寄与率(%)	22.969	16.058	7.110	46.137
累積寄与率	22.969	39.027	46.137	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table3-13 日常会話場面(抑制なし)における発言者Bの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
2. 人のわるい-人のよい	.877	.099	-.072	.182	.818
3. なまいきでない-なまいきな	-.687	.262	.036	-.212	.587
6. 心のひろい-心のせまい	-.681	.053	.275	.054	.546
4. ひとつっこい-近づきたい	-.681	-.356	-.038	.008	.592
20. 不親切な-親切な	.672	.121	-.326	-.204	.614
5. にくらしい-かわいらしい	.671	.204	.137	.078	.517
14. 感じの悪い-感じのよい	.656	.376	-.162	-.122	.613
19. 気長な-短気な	-.620	.164	.095	.048	.423
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.581	-.045	-.076	-.022	.346
12. 沈んだ-うきうきした	.095	.731	.072	-.399	.707
7. 非社交的な-社交的な	.431	.723	-.016	-.037	.710
17. 無気力な-意欲的な	.381	.678	-.090	.031	.615
18. 自信のない-自信のある	-.146	.678	-.058	-.102	.495
1. 積極的な-消極的な	.065	-.674	-.140	.219	.526
15. 分別のある-無分別な	-.129	-.003	.724	-.031	.542
8. 責任感のある-責任感のない	-.048	-.200	.630	.205	.481
9. 軽率な-慎重な	-.013	-.149	-.623	.557	.721
11. 重厚な-軽薄な	-.028	.127	.577	-.266	.421
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.152	-.435	-.200	.718	.769
13. 堂々とした-卑屈な	-.036	-.469	.136	.474	.464
因子寄与	4.636	3.354	1.987	1.530	11.507
寄与率 (%)	23.180	16.769	9.934	7.651	57.534
累積寄与率	23.180	39.949	49.883	57.534	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

3.2.6 発言者 B についての印象形成の会話場面ごとの比較

発言者 B については、発言者 A とは異なり、各場面の各条件において、重要となる課題解決場面の[抑制あり条件]、[抑制なし条件]と日常会話場面の[抑制なし条件]ともに「個人的親しみやすさ」次元に対応した項目の負荷が高かったのに対して、日常会話場面の[抑制あり条件]においては「活動性」次元に対応した項目の負荷が高い因子構造となった。条件によって重要な次元が異なるということが明らかになった。

3.2.7 課題解決場面における発言者 C の印象について

課題解決場面において発言者 C について因子分析を行った(Table3-14, Table3-15)。[抑制あり条件]、[抑制なし条件]ともに 5 因子を抽出した。

[抑制あり条件]では、第 1 因子は「ひとなつっこい・近づきがたい」など 9 項目で構成された。第 2 因子は「堂々とした・卑屈な」など 4 項目で構成された。第 3 因子は「無気力な・意欲的な」など 3 項目で構成された。第 4 因子は「重厚な・軽薄な」など 2 項目で構成された。第 5 因子は「心のひろい・心のせまい」の 1 項目で構成された。

基本的三次元に対応させると、第 1 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 2 因子は「社会的望ましさ」に、第 3 因子、第 4 因子は「活動性」に完全に対応した因子構造となった。

[抑制なし条件]では、第 1 因子は「自信のある・自信のある」など 5 項目で構成された。第 2 因子は「ひとなつっこい・近づきがたい」など 6 項目で構成された。第 3 因子は「重厚な・軽薄な」など 3 項目で構成された。第 4 因子は「気長な・短気な」など 4 項目で構成された。第 5 因子では「分別のある・無分別な」など 2 項目で構成された。この因子分析結果においては、第 1 因子と第 4 因子は「活動性」に、第 2 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 3 因子、第 5 因子は「社会的望ましさ」と「活動性」が半分ずつ混在する因子構造となった。

発言者 C はどちらの条件も全く同じセリフであった。しかし、条件ごとに異なる因子構造を取った。[抑制あり条件]では「個人的親しみやすさ」次元の影響が大きく、[抑制なし条件]では「活動性」次元の影響が大きく出ている。各条件間の違いは発言者 A の発言抑制行動の有無のみである。そのことから、発言抑制行動は、行為者だけではなく他の会話参加者の印象にも影響を与えている可能性が考えられる。

Table3-14 課題解決場面(抑制あり)における発言者Cの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	5	共通性
4. ひとなつっこい-近づきたい	-.813	.147	-.150	-.021	.001	.705
5. にくらしい-かわいらしい	.780	-.041	-.041	.107	.163	.650
14. 感じの悪い-感じのよい	.758	.222	.287	.093	.276	.791
3. なまいきでない-なまいきな	-.708	.167	.086	-.263	.048	.607
2. 人のわるい-人のよい	.706	.306	.232	-.004	.201	.687
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.675	-.039	-.426	-.237	-.246	.756
20. 不親切な-親切な	.583	.223	.366	.057	.282	.606
19. 気長な-短気な	-.582	-.164	-.168	.041	.006	.396
12. 沈んだ-うきうきした	.482	.216	.141	.453	.342	.622
13. 堂々とした-卑屈な	-.032	-.945	-.009	-.040	.044	.898
18. 自信のない-自信のある	-.036	.658	.329	.091	.147	.573
8. 責任感のある-責任感のない	-.053	-.642	-.062	.232	-.177	.504
1. 積極的な-消極的な	-.330	-.434	-.358	.098	.291	.519
17. 無気力な-意欲的な	.111	.553	.659	-.089	.019	.761
15. 分別のある-無分別な	-.177	-.054	-.607	.156	-.132	.445
7. 非社交的な-社交的な	.427	.292	.445	-.190	.026	.502
11. 重厚な-軽薄な	.232	-.130	-.073	.812	-.025	.736
9. 軽率な-慎重な	.001	.020	.129	-.639	-.020	.426
6. 心のひろい-心のせまい	-.372	-.141	-.166	.002	-.709	.688
因子寄与	4.742	2.677	1.823	1.565	1.065	11.872
寄与率 (%)	24.958	14.088	9.595	8.238	5.604	62.484
累積寄与率	24.958	39.046	48.641	56.879	62.484	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table3-15 課題解決場面(抑制なし)における発言者Cの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	5	共通性
18. 自信のない-自信のある	.755	-.038	-.185	.117	-.194	.657
12. 沈んだ-うきうきした	.730	-.257	.055	.041	.093	.612
7. 非社交的な-社交的な	.655	-.133	-.060	.315	-.251	.613
17. 無気力な-意欲的な	.612	-.128	-.480	.080	-.121	.642
1. 積極的な-消極的な	-.511	.076	.115	.193	.362	.449
4. ひとなつこい-近づきたい	-.199	.808	.282	.081	.137	.797
16. 親しみやすい-親みにくい	-.403	.608	-.194	-.194	.071	.613
6. 心のひろい-心のせまい	-.117	.588	.035	-.203	.289	.485
3. なまいきでない-なまいきな	.009	.542	.195	-.277	-.067	.413
14. 感じの悪い-感じのよい	.387	-.475	-.141	.454	-.126	.617
5. にくらしい-かわいらしい	.043	-.442	.070	.279	.249	.342
11. 重厚な-軽薄な	.173	-.067	.796	-.153	.088	.700
8. 責任感のある-責任感のない	-.363	.266	.585	-.138	.120	.578
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	-.250	.109	.452	-.058	.150	.305
19. 気長な-短気な	.089	.166	-.016	-.622	-.009	.423
20. 不親切な-親切な	.457	-.225	-.186	.560	-.038	.608
9. 軽率な-慎重な	.199	-.098	-.293	.476	-.127	.378
2. 人のわるい-人のよい	.248	-.374	-.311	.467	-.121	.531
15. 分別のある-無分別な	-.130	.037	.117	-.202	.765	.658
13. 堂々とした-卑屈な	-.272	.141	.424	.099	.590	.632
因子寄与	3.168	2.526	2.058	1.846	1.454	11.052
寄与率 (%)	15.839	12.628	10.288	9.231	7.272	55.259
累積寄与率	15.839	28.468	38.755	47.986	55.259	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

3.2.8 日常会話場面における発言者 C の印象について

課題解決場面において発言者 C について因子分析を行った(Table3-16,Table3-17)。**[抑制あり条件][抑制なし条件]**ともに 4 因子を抽出した。

[抑制あり条件]では、第 1 因子は「感じのよい・感じの悪い」など 7 項目で構成された。第 2 因子は「責任感のある・責任感のない」など 5 項目で構成された。第 3 因子は「沈んだ・うきうきした」など 4 項目で構成された。第 4 因子は「自信のない・自信のある」など 4 項目で構成された。

基本的三次元に対応させると、第 1 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 2 因子は「社会的望ましさ」に、第 3 因子は 3 次元の項目が混在しており、第 4 因子は「活動性」と「個人的親しみやすさ」に対応した因子構造となった。

[抑制なし条件]では、第 1 因子は「にこらしい・かわいらしい」など 6 項目で構成された。第 2 因子は「軽率な・慎重な」など 6 項目で構成された。第 3 因子は「無気力な・意欲的な」など 5 項目で構成された。第 4 因子は「不親切な・親切な」など 3 項目で構成された。この因子分析結果においては、第 1 因子と第 4 因子は「個人的親しみやすさ」に、第 2 因子は「社会的望ましさ」に、第 3 因子は「活動性」にそれぞれ対応する因子構造となった。

日常会話場面においては、**[抑制あり条件]**と**[抑制なし条件]**で似たような因子構造を取っていた。どちらも、「個人的親しみやすさ」次元の負荷が高く、次いで、「社会的望ましさ」の次元が高くなっていた。発言者 C に対しての印象を形成する上で、個人的親しみやすさの次元が重要であるということが言えると考えられる。

Table3-16 日常会話場面(抑制あり)における発言者Cの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
14. 感じの悪い-感じのよい	-.895	-.139	.204	-.067	.867
6. 心のひろい-心のせまい	.782	.246	-.028	.085	.679
3. なまいきでない-なまいきな	.701	.229	.113	.155	.581
20. 不親切な-親切な	-.646	-.416	.144	.058	.615
2. 人のわるい-人のよい	-.639	-.135	.345	-.152	.570
16. 親しみやすい-親しみにくい	.405	.341	-.384	.009	.427
1. 積極的な-消極的な	.220	-.051	-.182	.072	.089
8. 責任感のある-責任感のない	.132	.783	-.124	-.062	.651
9. 軽率な-慎重な	-.151	-.664	-.067	-.330	.577
11. 重厚な-軽薄な	.291	.658	.252	.159	.606
15. 分別のある-無分別な	.310	.541	.030	.091	.397
13. 堂々とした-卑屈な	-.086	.299	-.258	-.297	.251
12. 沈んだ-うきうきした	.013	-.015	.749	.191	.598
7. 非社交的な-社交的な	-.164	-.011	.692	-.075	.511
17. 無気力な-意欲的な	-.136	.123	.622	.171	.450
4. ひととなつこい-近づきたい	.462	.170	-.475	.020	.468
18. 自信のない-自信のある	-.128	.075	.480	.667	.696
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	-.052	-.046	-.081	-.593	.363
19. 気長な-短気な	.313	.369	-.062	.563	.555
5. にくらしい-かわいらしい	-.451	-.113	.232	-.544	.566
因子寄与	3.749	2.512	2.472	1.783	10.516
寄与率 (%)	18.747	12.559	12.359	8.914	52.579
累積寄与率	18.747	31.306	43.664	52.579	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table3-17 日常会話場面(抑制なし)における発言者Cの印象評定に関する因子分析結果

	1	2	3	4	共通性
5. にくらしい-かわいらしい	.847	-.162	-.100	.032	.754
14. 感じの悪い-感じのよい	.786	-.383	.131	-.212	.826
2. 人のわるい-人のよい	.751	-.476	.064	-.046	.797
6. 心のひろい-心のせまい	-.731	.408	.110	.189	.748
16. 親しみやすい-親しみにくい	-.715	.101	-.005	.184	.555
4. ひとなつっこい-近づきがたい	-.705	.015	-.034	-.096	.508
9. 軽率な-慎重な	.204	-.835	-.195	-.083	.783
11. 重厚な-軽薄な	-.142	.765	.251	.121	.683
8. 責任感のある-責任感のない	-.170	.755	-.180	-.085	.639
15. 分別のある-無分別な	-.326	.691	-.004	.196	.622
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.164	-.507	-.461	-.339	.611
3. なまいきでない-なまいきな	-.331	.356	.127	-.061	.256
17. 無気力な-意欲的な	.028	.102	.887	.121	.813
13. 堂々とした-卑屈な	.009	.049	-.720	-.073	.526
12. 沈んだ-うきうきした	.134	.127	.683	.165	.528
1. 積極的な-消極的な	.160	-.146	-.497	.020	.294
7. 非社交的な-社交的な	.397	-.129	.404	.206	.380
20. 不親切な-親切な	.480	-.457	-.006	-.612	.813
18. 自信のない-自信のある	.079	-.148	.356	.579	.490
19. 気長な-短気な	-.087	.296	.125	.417	.285
因子寄与	4.221	3.675	2.731	1.286	11.913
寄与率 (%)	21.103	18.376	13.656	6.431	59.567
累積寄与率	21.103	39.479	53.135	59.567	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

3.3 ソーシャルスキル評定尺度について

3.3.1 会話場面間での発言者 A・B・C のソーシャルスキル得点の比較

発言者 A・B・C それぞれについて会話場面の差と抑制の有無の差の検討のために、会話場面（課題解決場面・日常会話場面）と、抑制（あり・なし）を独立変数、ソーシャルスキル得点を従属変数にして分散分析を行った。

発言者 A について分析を行った結果、場面*抑制の交互作用が有意であった($F(1,289)=5.9.65$)。そのため単純主効果の検定を行った。日常場面において、抑制の単純主効果が有意であった($F(1,289)=123.25, p<.01$)。抑制あり、なしどちらにおいても場面の単純主効果が有意であった($F(1,289)=7.06, p<.01$ $F(1,289)=68.79, p<.01$)。

発言者 B について分析を行った結果、場面*抑制の交互作用に有意差は見られなかった。そのため、主効果の検定を行った。その結果、場面の主効果が有意であった($F(1,289)=3.99, p<.05$)。

発言者 C について分析を行った結果、場面*抑制の交互作用が有意であった($F(1,293)=10.54$)。そのため単純主効果の検定を行った。日常場面において抑制の単純主効果が有意であった($F(1,293)=12.6, p<.01$)。[抑制あり条件]において場面の単純主効果が有意であった($F(1,293)=8.50, p<.01$)。

すべての評価対象者について、場面の主効果が見られた。これは、場面によって、話している内容に差があったために生じたものと考えられる。

発言者 B・C については場面間の発言内容に違いはあったが、各会話場面における抑制の有無による発言内容の違いはなかった。どちらも抑制の有無の条件間での差はなかったが、発言者 C については日常場面で抑制の単純主効果が有意であり、発言者 B では有意な差は見られない、という差が生じた。

Table3-18 各発言者の社会的スキル得点の平均値と分散分析結果

会話場面 発言抑制行動	課題解決場面		日常会話場面		主効果		交互作用
	あり	なし	あり	なし	場面	抑制	
社会的スキル得点							
発言者A	24.75 3.60	24.88 4.21	22.98 3.91	30.38 4.25	63.79 **	15.59 **	59.65 **
発言者B	33.23 3.22	32.28 4.54	33.83 4.33	33.64 4.35	1.33	3.99 *	.60
発言者C	33.59 3.69	32.91 4.69	31.71 3.75	34.00 3.20	3.12	.76	10.54 **

3.3.2 社会的スキルと特性形容詞尺度の関連について

社会的スキル得点と、特性形容詞尺度各項目の関連について、相関係数を算出した(Table3-19 から Table3-21)。社会的スキル得点については、逆転項目を処理した後、各項目の得点を合計して算出した。

その結果、「感じの悪い感じのよい」において全ての条件において全評定対象者について正の相関がみられた。つまり、どの条件においても、社会的スキルがあると認識されるほど「感じのよい」人であるということである。他の項目についても、すべての項目にどこかの条件では有意な相関関係が見られた。例えば特に相関関係が多く見られた項目は「人のわるい・人のよい」「非社会的・社会的な」で、どちらも正の相関がみられた。

発言者 B について、「軽率な・慎重な」という項目で、課題解決場面においては、正の相関がみられ一方で日常会話場面の[抑制なし条件]では負の相関がみられた。つまり、本研究で設定した課題解決場面においては、社会的スキルが高いと認識されると「慎重な」人物であると評価されるが、一方で日常会話場面では社会的スキルが高いと認識されると「軽率な」人物であると評価されるということである。それ以外の項目については相関関係が見られた部分については、条件間や評価対象者間で同じ傾向が見られた。本研究では社会的スキルの有無と印象の関係性は、会話場面、抑制の有無、評価対象者に依らず安定的であった。

Table3-19 社会的スキルと特性形容詞尺度の相関係数(発言者A)

A	課題解決場面		日常会話場面	
	抑制あり	抑制なし	抑制あり	抑制なし
1. 積極的な-消極的な	-0.31 *	-0.19	-0.42 **	-0.50 **
2. 人のわるい-人のよい	0.45 **	0.46 **	0.43 **	0.43 **
3. なまいきでない-なまいきな	-0.45 **	-0.18	-0.29 **	-0.46 **
4. ひとなつこい-近づきたい	-0.28 *	-0.10	-0.30 **	-0.43 **
5. にくらしい-かわいらしい	0.38 **	0.26 *	0.16	0.27 *
6. 心のひろい-心のせまい	-0.42 **	-0.10	-0.39 **	-0.33 **
7. 非社会的な-社会的な	0.21	0.24 *	0.28 *	0.36 **
8. 責任感のある-責任感のない	-0.33 **	-0.19	-0.18	-0.41 **
9. 軽率な-慎重な	0.10	0.28 *	0.19	0.14
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	-0.03	0.05	-0.07	-0.15
11. 重厚な-軽薄な	-0.07	-0.16	0.01	-0.22
12. 沈んだ-うきうきした	0.33 **	0.22 *	0.43 **	0.35 **
13. 堂々とした-卑屈な	-0.34 **	-0.16	-0.18	-0.32 **
14. 感じの悪い-感じのよい	0.43 **	0.34 **	0.30 **	0.56 **
15. 分別のある-無分別な	-0.40 **	-0.14	-0.36 **	-0.35 **
16. 親しみやすい-親みにくい	-0.27 *	-0.23 *	-0.38 **	-0.57 **
17. 無気力な-意欲的な	0.13	0.39 **	0.35 **	0.48 **
18. 自信のない-自信のある	-0.06	0.35 **	0.08	0.24 *
19. 気長な-短気な	-0.33 **	0.01	-0.25 *	-0.18
20. 不親切な-親切的な	0.36 **	0.22	0.42 **	0.51 **

*p<.05,**p<.01

Table3-20 社会的スキルと特性形容詞尺度の相関係数(発言者B)

B	課題解決場面		日常会話場面	
	抑制あり	抑制なし	抑制あり	抑制なし
1. 積極的な-消極的な	-.186	-.410 **	-.507 **	-.411 **
2. 人のわるい-人のよい	.363 **	.482 **	.312 **	.089
3. なまいきでない-なまいきな	-.292 *	-.133	-.288 **	.047
4. ひととなつこい-近づきたい	-.332 **	-.190	-.392 **	-.337 **
5. にくらしい-かわいらしい	.320 **	.398 **	.489 **	.095
6. 心のひろい-心のせまい	-.217	-.002	-.462 **	-.050
7. 非社交的な-社交的な	.450 **	.584 **	.648 **	.460 **
8. 責任感のある-責任感のない	-.191	-.028	-.074	-.195
9. 軽率な-慎重な	.304 *	.256 *	-.055	-.299 *
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.229	-.023	-.211	-.427 **
11. 重厚な-軽薄な	-.234	-.017	.107	.153
12. 沈んだ-うきうきした	.133	.465 **	.542 **	.474 **
13. 堂々とした-卑屈な	-.270 *	-.451 **	-.391 **	-.422 **
14. 感じの悪い-感じのよい	.433 **	.558 **	.440 **	.337 **
15. 分別のある-無分別な	-.187	.038	-.226 *	-.118
16. 親しみやすい-親みにくい	-.259 *	-.190	-.404 **	-.128
17. 無気力な-意欲的な	.262 *	.494 **	.564 **	.413 **
18. 自信のない-自信のある	.179	.480 **	.295 **	.425 **
19. 気長な-短気な	-.418 **	-.207	-.166	-.115
20. 不親切な-親切な	.308 *	.496 **	.336 **	.260 *

*p<.05,**p<.01

Table3-21 社会的スキルと特性形容詞尺度の相関係数(発言者C)

C	課題解決場面		日常会話場面	
	抑制あり	抑制なし	抑制あり	抑制なし
1. 積極的な-消極的な	-.291 *	-.308 **	-.202	-.337 **
2. 人のわるい-人のよい	.299 *	.417 **	.442 **	.374 **
3. なまいきでない-なまいきな	-.096	-.153	-.397 **	-.190
4. ひととなつこい-近づきたい	-.201	-.310 **	-.431 **	-.216
5. にくらしい-かわいらしい	.132	.038	.249 *	.355 **
6. 心のひろい-心のせまい	-.142	-.297 **	-.414 **	-.302 *
7. 非社交的な-社交的な	.379 **	.587 **	.299 **	.326 **
8. 責任感のある-責任感のない	-.214	-.496 **	-.357 **	-.323 **
9. 軽率な-慎重な	-.114	.265 *	.275 *	.172
10. 恥知らずの-恥ずかしがりの	.056	-.449 **	.018	.005
11. 重厚な-軽薄な	.026	-.127	-.251 *	-.122
12. 沈んだ-うきうきした	.226	.402 **	.234 *	.199
13. 堂々とした-卑屈な	-.379 **	-.450 **	-.191	-.087
14. 感じの悪い-感じのよい	.419 **	.424 **	.492 **	.466 **
15. 分別のある-無分別な	-.260 *	-.394 **	-.293 **	-.301 *
16. 親しみやすい-親みにくい	-.307 *	-.319 **	-.343 **	-.170
17. 無気力な-意欲的な	.400 **	.510 **	.295 **	.172
18. 自信のない-自信のある	.173	.561 **	.250 *	.175
19. 気長な-短気な	-.167	-.134	-.405 **	-.066
20. 不親切な-親切な	.143	.469 **	.482 **	.230

*p<.05,**p<.01

3.4 各評価対象者の全体的な印象項目について

各評価対象者についての全体的な印象項目について、発言者 A・B・C それぞれについて会話場面の差と抑制の有無の差の検討のために、会話場面（課題解決場面・日常会話場面）と、抑制（あり・なし）を独立変数、会話場面ごとに測定したそれぞれの発言者の印象が良いか悪いかを尋ねた、全体的な印象得点を従属変数にして分散分析を行った。

発言者 A について分析を行った結果、場面*抑制の交互作用に有意な差は見られなかった($F(1,296)=4.28$, n.s.)。主効果の検定を行ったところ、場面と抑制に主効果が見られた($F(1,296)=9.41$, $p<.05$ $F(1,296)=11.64$, $p<.05$)。発言者 A については、課題解決場面の方が日常会話場面よりも良い印象を持たれていた。また、抑制の有無で比較すると、発言抑制をしない方が良い印象を持たれていた。

発言者 B について分析を行った結果、場面*抑制の交互作用に有意な差は見られなかった($F(1,296)=2.84$, n.s.)。主効果についても有意な差は見られなかった。

発言者 C について分析を行った結果、場面*抑制の交互作用が有意であった($F(1,296)=47.11$, $p<.01$)。そのため単純主効果の検定を行った。会話場面については、課題解決場面と日常会話場面の両方において抑制の単純主効果が有意であった($F(1,296)=30.49$, $p<.01$ $F(1,296)=17.17$, $p<.01$)。課題解決場面においては、[抑制あり条件]の方が印象は良いが、日常会話場面においては、[抑制なし条件]の方が印象はよくなる、という結果が得られた。また、抑制の有無についても[抑制あり条件]と[抑制なし条件]の両方において場面の単純主効果が有意であった($F(1,293)=8.50$, $p<.01$)。

第4章 検討Ⅱ

第4章では、発言者全体、会話全体についての分析結果について述べる。各変数について発言者 A・B・C の比較や、会話条件間の比較を記載する。

4.1 各変数の記述統計量

分析対象者は検討Ⅰと同様に調査対象者 150 名（男性 42 名・女性 108 名）とした。各変数の記述統計量については、結果Ⅰと同様であるので、ここでは記載しない。

4.1.1 特性形容詞尺度の平均値比較

特性形容詞尺度について、条件別に発言者 A・B・C それぞれの平均値について各条件で比較を行った(Figure4-1 から Figure4-4)。

課題解決場面における発言者 A・B・C の 3 人の特性形容詞得点の平均値の比較を行った(Figure4-1, Figure4-2)。その結果、発言者 A と発言者 B・C の平均値の分布が逆になる項目が多くあった。また、[抑制あり条件][抑制なし条件]ともに「積極的な・消極的な」「非社会的な・社会的な」「親しみやすい・親しみにくい」「無気力な・意欲的な」で発言者 A と発言者 B・C の間に大きな差(2 以上の差)が見られた。発言者 A に対しては他の 2 人よりも「消極的な」「非社会的な」「親しみにくい」「無気力な」人物であるという印象が形成されていたといえる。これらの項目について[抑制あり条件]と「なし条件」で比較すると、[抑制あり条件]の方が、より発言者 A と発言者 B・C の間の差が大きく開いており、これらの印象については発言抑制を行うことでより強調されて印象形成されたと考えられる。他には、「なまいきでない・なまいきな」について、[抑制なし条件]の方が、発言者 A と発言者 B・C の差が大きく生じていた。また[抑制なし条件]の方が「なまいきな」人物であるという印象が形成されていた。これは[抑制なし条件]の方が発言頻度が多く、また[抑制なし条件]での発言内容に相手の意見に対する否定的な意見があったためにこのような結果になったと考えられる。しかし、全体的に見ると、発言者 A と発言者 B・C の差がより大きく開くのは、必ずしも[抑制あり条件]でなく、[抑制あり条件]、[抑制なし条件]ともに、差が大きく開く項目が見られた。そのため、項目によっては発言抑制行動の表出によって印象が抑制されたものもあると考えられる。

次に日常会話場面における発言者 A・B・C の 3 人の特性形容詞得点の平均値の比較を行

った(Figure4-3, Figure4-4)。その結果、発言者 A と発言者 B・C の間に大きな差が見られた項目は、「積極的な・消極的な」「社交的な・非社交的な」「無気力な・意欲のある」であった。日常会話場面でも「消極的な」「非社交的な」「無気力な」人物であるという印象が形成されたといえる。日常会話場面においても、[抑制あり条件]の方が、より発言者 A と発言者 B・C の間の差が開いており、発言抑制行動を行うことでより強調された印象形成がなされたと考えられる。他には、「ひとなつっこい・近づきがたい」「沈んだ・うきうきした」「感じの悪い・感じのよい」「自信のない・自信のある」で[抑制あり条件]の方が、発言者 A と発言者 B・C の差が生じていた。[抑制あり条件]の方が「近づきがたい」「沈んだ」「感じの悪い」「自信のない」人物であるという印象が形成されていた。全体的に見ると、発言者 A と発言者 B・C の差がより大きく開くのは、[抑制あり条件]の方に偏っていた。発言抑制行動によって、全体的に強調されて印象が形成されていたと考えられる。

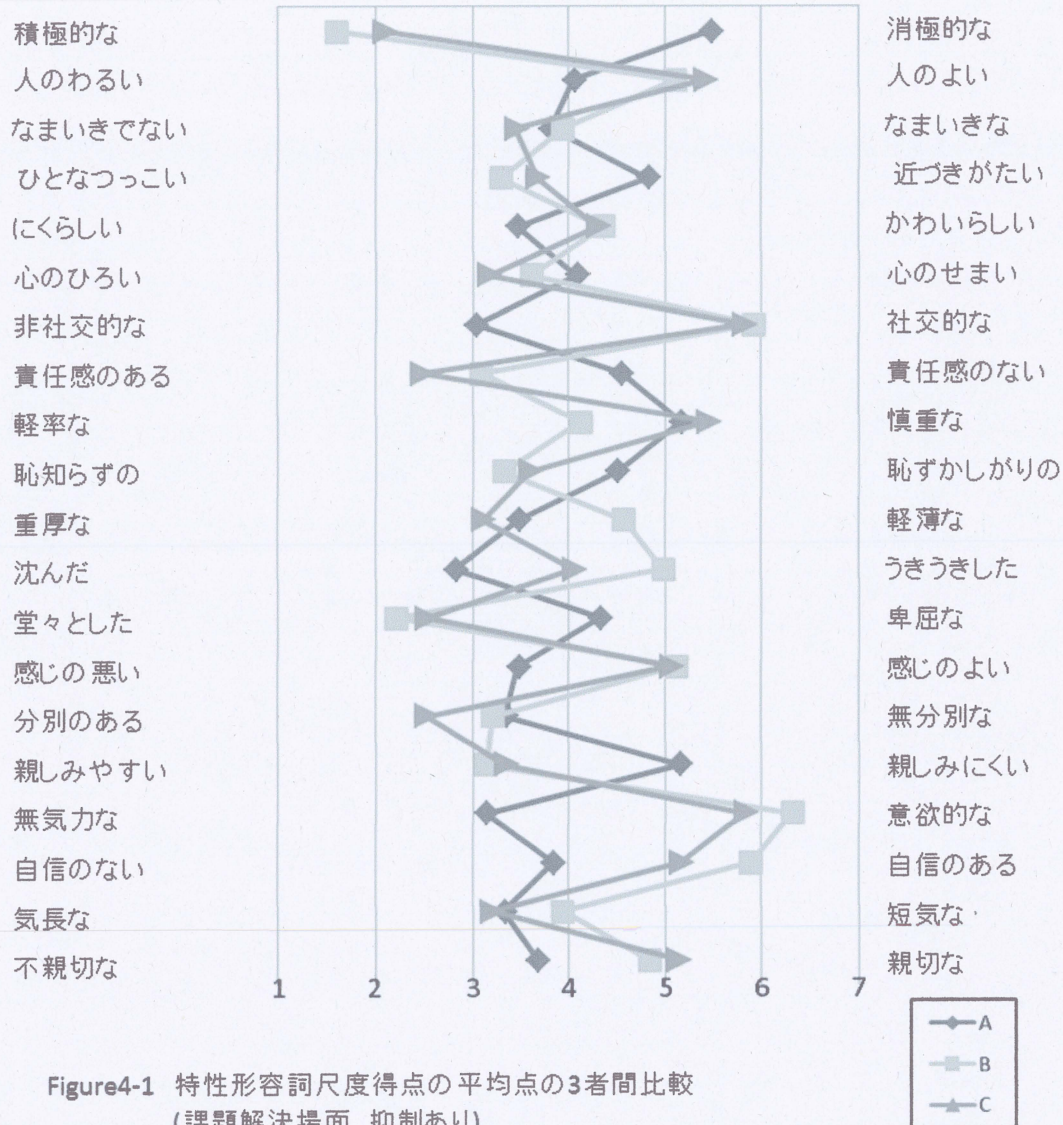


Figure4-1 特性形容詞尺度得点の平均点の3者間比較
(課題解決場面 抑制あり)

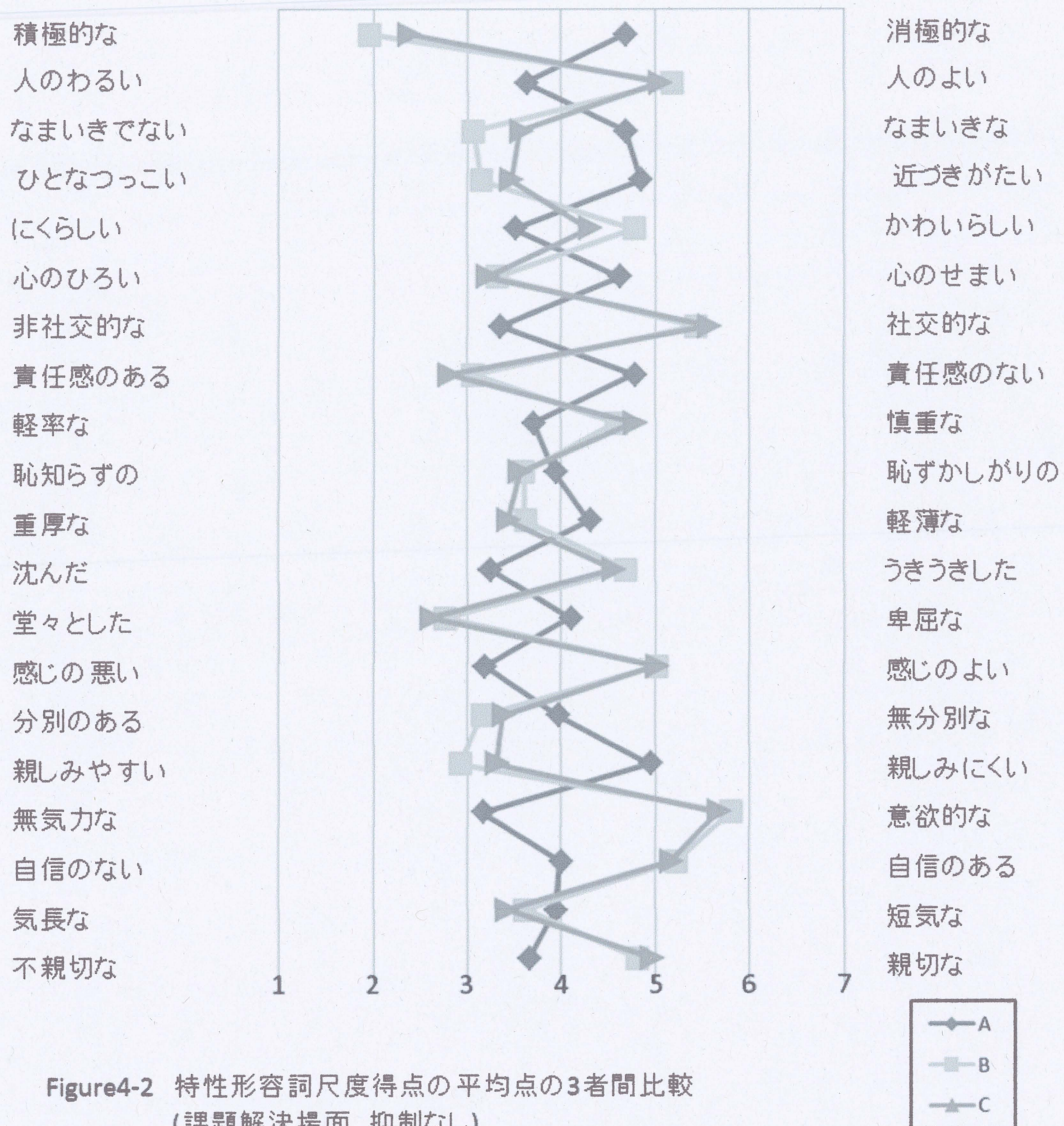


Figure 4-2 特性形容詞尺度得点の平均点の3者間比較
(課題解決場面 抑制なし)

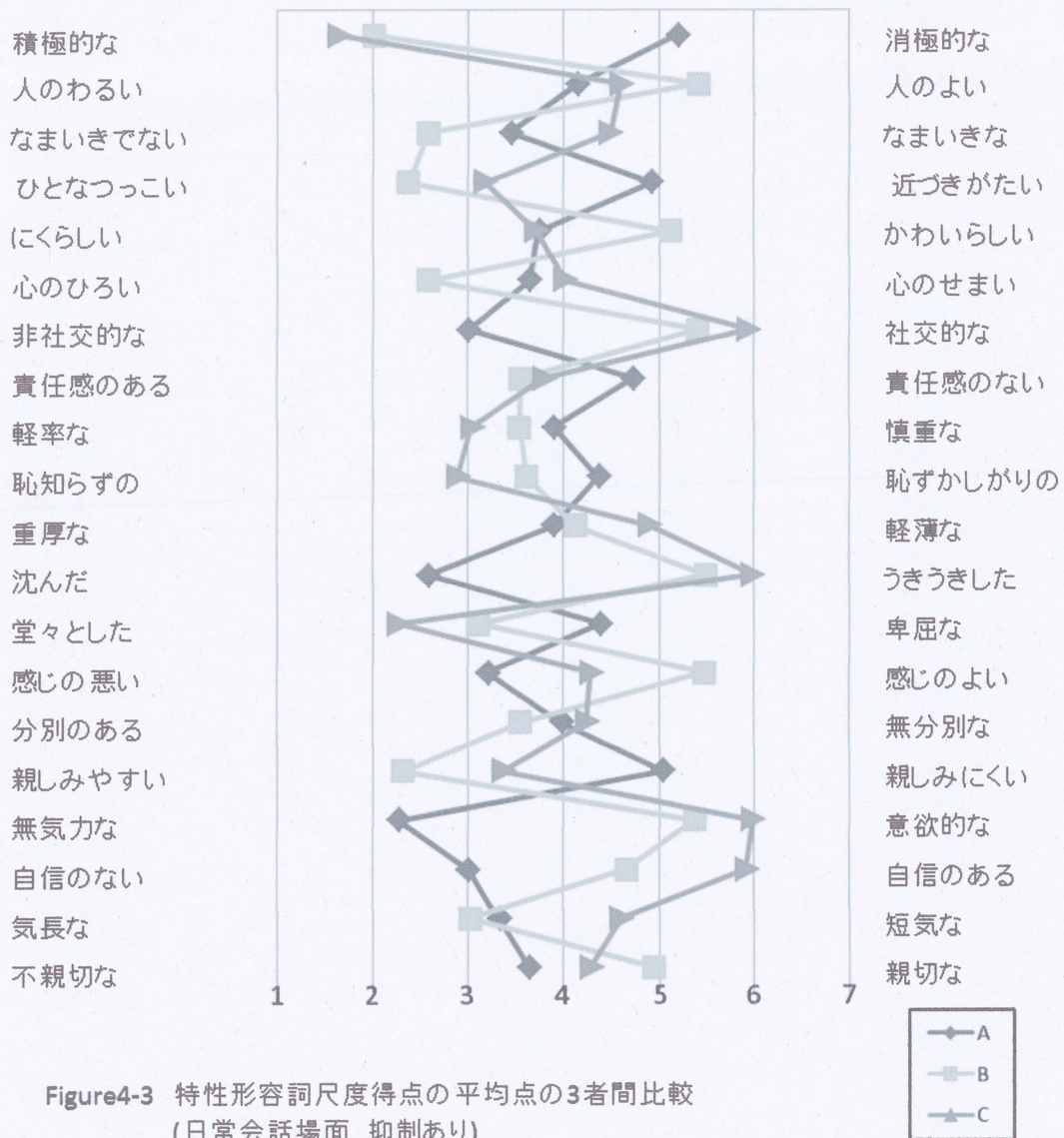


Figure4-3 特性形容詞尺度得点の平均点の3者間比較
(日常会話場面 抑制あり)

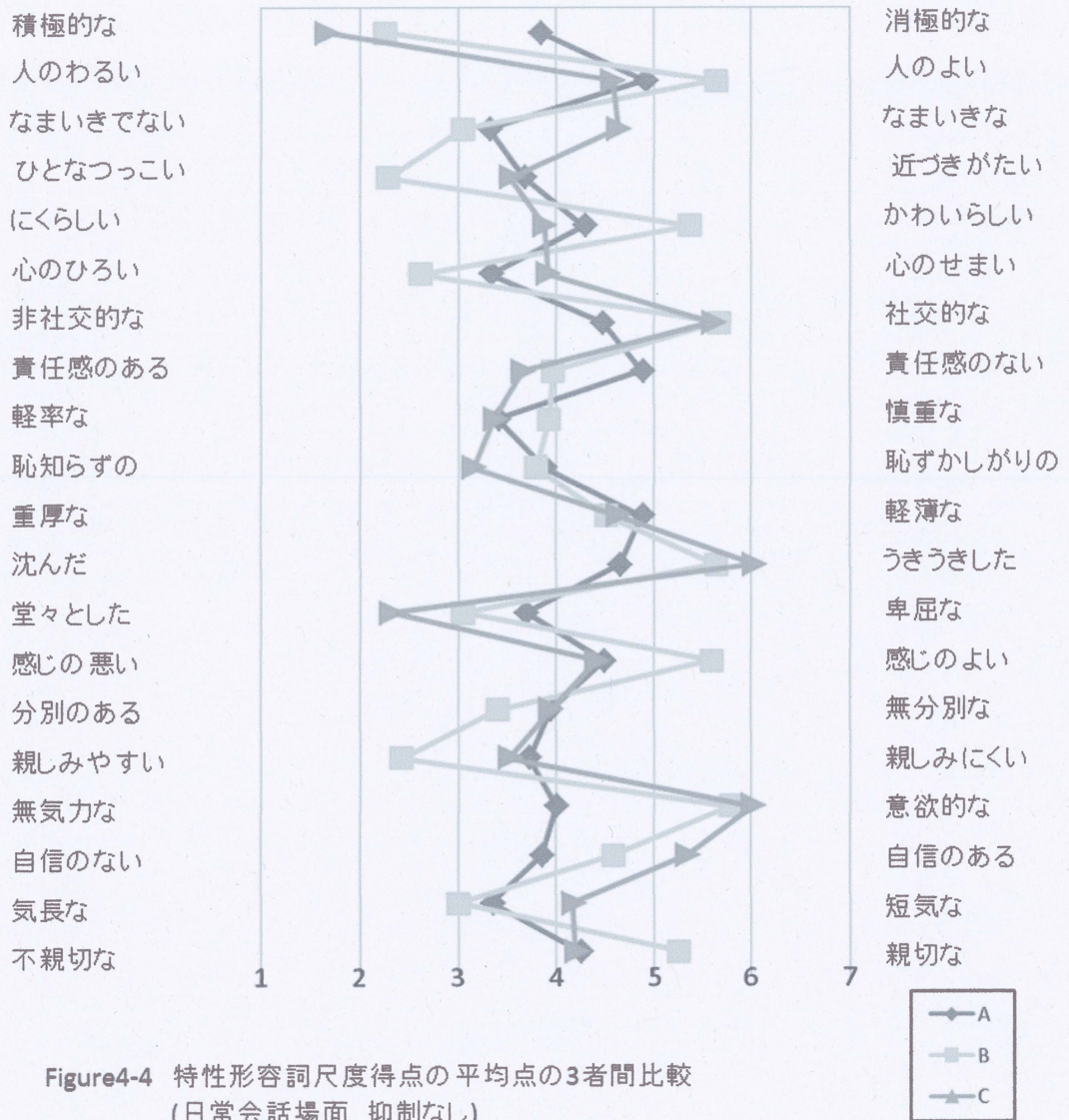


Figure4-4 特性形容詞尺度得点の平均点の3者間比較
(日常会話場面 抑制なし)

4.2 各会話場面における社会的スキル得点の3者間比較

4.2.1 課題解決場面における社会的スキル得点の3者間比較

課題解決場面の[抑制あり条件]・[抑制なし条件]それぞれについて、発言者A・発言者B・C3者の社会的スキル得点について、一要因分散分析を行った(Table4-2, Table4-3)。

[抑制あり条件]において分析を行った結果、 $F(2,126) = 29.18$, $p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-1)、発言者Aと発言者B、発言者Aと発言者Cの間に有意な差が見られた。

[抑制なし条件]においても同様に、分析を行った結果、 $F(2,154) = 165.29$, $p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-1)、発言者Aと発言者B、発言者Aと発言者Cの間に有意な差が見られた。

[抑制あり条件]、[抑制なし条件]ともに、発言者Aの社会的スキルは他の2人に比較すると有意に低く評価されていた。[抑制あり条件]では、発言者Aは規範状況に合わせた発言抑制行動を行うという設定を行ったので、社会的スキルは高く評価されると予想していたが、結果は予想とは反するものであった。

Table4-1 各発言者における社会的スキル得点の平均値と標準偏差

	A		B		C		多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	
課題解決場面							
抑制あり	30.47	4.287	33.64	4.347	33.97	3.222	A<B,A<C
抑制なし	24.90	4.082	32.29	4.530	32.99	4.591	A<B,A<C
日常会話場面							
抑制あり	23.03	3.912	33.95	4.120	31.54	3.724	A<B,A<C,C<B
抑制なし	24.75	3.601	33.25	3.245	33.63	3.702	A<B,A<C

Table4-2 課題解決場面(抑制あり)における各発言者の社会的スキル得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	478.26	2	239.13	29.18	.000 **
誤差	1032.41	126	8.19		
全体	1510.67	128			

* $p<.05$,** $p<.01$

Table4-3 課題解決場面(抑制なし)における各発言者の社会的スキル得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	3136.78	2	1568.39	165.29	.000 **
誤差	1461.22	154	9.49		
全体	4598.00	156			

* $p<.05$,** $p<.01$

4.2.2 日常会話場面における社会的スキル得点の3者間比較

日常会話場面の[抑制あり条件]・[抑制なし条件]それぞれについて、発言者 A・B・C3 者の社会的スキル得点について、一要因分散分析を行った(Table4-4,Table4-5)。

[抑制あり条件]において分析を行った結果、 $F(2,156) = 183.95$, $p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-1)、発言者 A と発言者 B、発言者 A と発言者 C、発言者 B と発言者 C の間に有意な差が見られた。

[抑制なし条件]においても同様に、分析を行った結果、 $F(2,128) = 168.09$, $p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-1)、発言者 A と発言者 B、発言者 A と発言者 C の間に有意な差が見られた。

日常会話場面についても、[抑制あり条件]、[抑制なし条件]ともに、発言者 A の社会的スキルは他の 2 人に比較すると有意に低く評価されていた。

また、[抑制あり条件]では、発言者 C よりも発言者 B の方が社会的スキルが高いと評価されていた。[抑制あり条件]において、発言抑制行動を表出していたのは発言者 A であり、発言者 B と発言者 C は抑制の有無で発言内容に変化はない。しかし、このような結果が得られた理由として以下のようなことが考えられる。実験刺激で用いた会話の中で、発言者 A が発言をする前に発言者 C が発言を行う頻度が高かった。また、抑制された内容が発言者 A の意見や提案などであった。[抑制あり条件]において、発言者 A に発言抑制が生じた原因として発言者 C の影響を推測した可能性が考えられる。つまり、「発言者 C の発言内容によって、発言者 A は話せなくなってしまった」という推測がなされたということである。

発言抑制行動は、行動を表出している発言者だけでなく、発言抑制を誘発したと推測される他の発言者にも影響を与えている可能性があると考えられる。

Table4-4 日常会話場面(抑制あり)における各発言者の社会的スキル得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	5205.90	2	2602.95	183.95	.00 **
誤差	2207.43	156	14.15		
全体	7413.33	158			

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table4-5 日常会話場面(抑制なし)における各発言者の社会的スキル得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	3273.12	2	1636.56	168.09	.000 **
誤差	1246.22	128	9.74		
全体	4519.33	130			

* $p < .05$, ** $p < .01$

4.3 各会話場面における発言者の全体印象得点の3者間比較

4.3.1 課題解決場面における発言者の全体印象得点の3者間比較

課題解決場面の[抑制あり条件]・[抑制なし条件]それぞれについて、発言者 A・B・C3 者の全体印象得点について、一要因分散分析を行った(Table4-7,Table4-8)。

[抑制あり条件]において分析を行った結果、 $F(2,130) = 19.96, p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-6)、発言者 A と発言者 B、発言者 A と発言者 C の間に有意な差が見られた。

[抑制なし条件]においても同様に、分析を行った結果、 $F(2,166) = 44.26, p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-6)、発言者 A と発言者 B、発言者 A と発言者 C の間に有意な差が見られた。

[抑制あり条件]、[抑制なし条件]ともに、発言者 A の全体的な印象は他の 2 人に比較すると有意に低く（ネガティブに）評価されていた。[抑制あり条件]では、他の 2 人に比較すると、意見を言う頻度が少なかった。これを他の発言者の発言を聴いているというようには認識されず、また、印象評定でも「消極的な」などのネガティブな印象が持たれていたことが原因の 1 つとして考えられる。

また、[抑制なし条件]では他の発言者の意見に対する否定的意見が表出されていたため、このような結果になったと考えられる。

Table4-6 各発言者における全体印象得点の平均値と標準偏差

	A		B		C		多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	
課題解決場面							
抑制あり	3.79	1.365	4.91	1.506	5.32	1.192	A<B,A<C
抑制なし	3.81	1.237	5.15	1.187	5.17	1.096	A<B,A<C
日常会話場面							
抑制あり	3.70	1.306	5.38	1.140	3.82	1.282	A<B,C<B
抑制なし	4.47	1.384	5.62	1.049	4.29	1.423	A<B,C<B

Table4-7 課題解決場面(抑制あり)における各発言者の全体印象得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	82.86	2.00	41.43	19.96	.000 **
誤差	269.81	130.00	2.08		
全体	352.67	132.00			

* $p<.05$,** $p<.01$

Table4-8 課題解決場面(抑制なし)における各発言者の全体印象得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	102.25	2.00	51.12	44.26	.000 **
誤差	191.75	166.00	1.16		
全体	294.00	168.00			

* $p<.05$,** $p<.01$

4.3.2 日常会話場面における発言者の全体印象得点の3者間比較

日常会話場面の[抑制あり条件]・[抑制なし条件]それぞれについて、発言者 A・B・C3 者の全体印象得点について、一要因分散分析を行った(Table4-9, Table4-10)。

[抑制あり条件]において分析を行った結果、 $F(2,166) = 45.21, p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-6)、発言者 A と発言者 B、発言者 B と発言者 C の間に有意な差が見られた。

[抑制なし条件]においても同様に、分析を行った結果、 $F(2,130) = 24.42, p < .01$ と有意な差が見られた。多重比較の結果(Table4-6)、発言者 A と発言者 B、発言者 B と発言者 C の間に有意な差が見られた。

[抑制あり条件]、[抑制なし条件]ともに、発言者 A の全体的な印象が発言者 B に比較すると有意に低く評価されていたのは、課題解決場面と同様の結果である。日常会話場面においては、発言者 B の全体的な印象が発言者 C に比較すると有意に低く評価されていた。

Table4-9 日常会話場面(抑制あり)における各発言者の全体印象得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	147.39	2.00	73.69	45.21	.000 **
誤差	270.61	166.00	1.63		
全体	418.00	168.00			

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table4-10 日常会話場面(抑制なし)における各発言者の全体印象得点の一要因分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
全体印象	69.01	2.00	34.51	24.42	.000 **
誤差	183.66	130.00	1.41		
全体	252.67	132.00			

* $p < .05$, ** $p < .01$

4.4 会話に対する印象評価得点について

会話に対する印象評価得点について、会話条件ごとの比較を行うために会話場面（課題解決場面・日常会話場面）と、抑制（あり・なし）を独立変数、会話に対する得点を従属変数にして分散分析を行った。分析を行った結果、場面*抑制の交互作用に有意な差は見られなかった($F(1,291)=.61$, n.s.)。主効果の検定を行ったところ、場面と抑制に主効果が見られた($F(1,291)=21.17$, $p<.01$ $F(1,291)=5.43$, $p<.05$)。場面については、課題解決場面の方が日常会話場面よりも会話全体が高く評価されていた。会話に対する印象評価に関する項目に「上手く調整されていた」や「協力的に会話が進んでいた」などがあつた。これらの項目については課題解決場面の方が、観察・評価が行いやすかつたのではないかと考えられる。

また、抑制の有無については、[抑制なし条件]の方が[抑制あり条件]よりも会話全体が高く評価されていた。発言抑制行動が表出されない方が、全体的にスムーズに会話が進んでいるように受け取られるということであると考えられる。

第5章 総合考察

5.1 本研究の概要

本研究では、3者間の会話場面における発言抑制行動に注目して、会話場面の違いによって他者に与える印象について明らかにすることを目的とするものであった。会話の場面は、2種類設定した。1つは議論や話し合いのような場面であり「結論を導く」などの目標を持った「進路選択などの場面において文系と理系の分類は必要か」という話題について会話された課題解決場面であり、もう1つは、雑談のような場面であり、課題解決場面で挙げたような特定の目標を持たず「会話すること」に楽しみ、目的を見出すような「ゼミ旅行の行先について」という話題について会話された日常会話場面である。それぞれの会話場面において適切な発言行動は異なると考えられるため、会話場面ごとに発言抑制行動を行った発言者(本研究では発言者A)に対する印象も異なると考えられる。具体的には、日常会話場面よりも課題解決場面のほうが発言抑制行動についてはポジティブな評価がなされると考えられる。

発言抑制行動の評価については、発言者の印象評定と併せて発言者自身がどの程度の社会的スキルを持っていると考えられるか評定させ、それを指標とした。つまり発言を抑制したときの社会的スキルが、発言抑制をしないときよりも高く評価されれば、発言抑制行動が適切な行動として捉えられているということである。

また、発言抑制行動を表出しない発言者(本研究では発言者BとC)についても、印象評定や社会的スキルの評定を行い、他者の発言抑制行動の影響について検討を行った(検討I)。これは、発言抑制行動を表出している本人でなくとも、例えば抑制を引き起こす原因になるなど、他者の発言抑制に直接の影響を受ければ、印象評価に差が生じると考えたためである。

第三者的な目線での評定を行ったということの意味として、木村・大坊・余語(2010)では、観察者の立場から他者のコミュニケーションを認知することは、周囲の人間関係を知る上での情報基盤であり、対人トラブルの予防や早期発見、その後の対処行動に影響するため、社会的適応基盤であるとしている。このことから、第三者の立場から観察をした結果にすることで、会話行動において円滑な対人コミュニケーション行動を取るための情報となることをねらったものである。

本研究で実施した実験の結果、発言者Aの印象評価について、課題解決場面においては、抑制ありのほうがネガティブな印象であり、抑制なしのほうがポジティブな印象と、予想

と反した結果となった。抑制の有無で社会的スキルの評価に関して有意な差は見られなかった。

日常会話場面でも、抑制ありのほうがポジティブな印象であり、抑制なしのほうがネガティブな印象と、こちらも予想と反した結果となった。しかし、社会的スキルについては抑制なし条件のほうが高く認識されていた。「どのような人物であるか」という印象評価と「社会的スキルがあるかないか」という評価については、必ずしも連動していないということではないかと考えられる。社会的スキルが高いからといって、必ずしもポジティブな印象を与えているわけではないということが示唆された。日常会話場面においては発言抑制行動を表出しないほうが社会的スキルは高く評価されるが、より多く発言することでその人物の印象についての推察を行う材料が多くなるので、その発言内容や、発言時の声など、例えば話し方が間延びして聞こえることで不真面目な印象を受ける、などの何らかの影響で印象がネガティブに形成されてしまったのではないだろうか。

また、発言抑制行動を表出していない発言者 B、C についても検討を行った。発言者 B については、各会話場面、抑制の有無の各条件でポジティブな印象、社会的スキルは高く評価されていた。発言者 C については、課題解決場面では抑制あり条件でポジティブな印象、抑制なし条件でネガティブな印象が形成されており、日常会話場面では逆の結果が得られた。発言者 B と発言者 C については、各会話場面の抑制あり条件、なし条件で発言内容に差はなかった。しかし、発言者 C については抑制の有無で印象に差が生じていた。この理由として、実験に使用したシナリオで発言者 C の発言で、発言者 A に向けられたものが多かったことが考えられる。課題解決場面では、抑制なし条件の発言者 A が発言者 C の発言を否定するニュアンスを持つものが見られ、話題展開としても発言者 A の意見が採用されるようなものであった。そのため、発言者 C の印象がネガティブになった可能性が考えられる。一方、日常会話場面では、発言者 C の発言を受けて発言者 A が発言をしている頻度が高かったので、発言者 C が発言者 A の発言抑制行動を誘発していると認識されて、印象がネガティブになった可能性が考えられる。

本研究においては、発言抑制行動を表出した発言者だけでなく、その人物の前後に発言する人物の印象にも影響がある可能性が示唆された。

次に、発言者全体や会話全体としての印象を把握し、会話場面ごとに比較検討を行った(検討Ⅱ)。

各条件で、印象や社会的スキルには発言者間でどのような関係があるかについて検討を

する。会話状況に発言抑制行動をする者がいる場合といない場合とで会話全体に対する評価がどのように異なるのかについて考察する。

その結果、各発言者の印象について、「積極的な・消極的な」や「社交的な・非社交的な」などの項目について、発言者 A によって発言抑制行動が表出されるほうが、発言者 B や発言者 C との差が大きく開き、より強調されて印象づけられることが明らかになった。

また、社会的スキルについても会話場面ごとに発言者同士での比較を行った。その結果、どの条件においても発言者 A の社会的スキルは他の 2 人に比較して有意に低く評価されていた。発言抑制行動の有無や会話条件では社会的スキルや全体的な印象が良いか悪いかといった評価が変わるということは見られなかった。発言者別でみると抑制の有無や会話条件で社会的スキルの評価が変わるという結果は得られた(検討 I)が、他者の評価と相対的に見ると、各発言者の社会的スキルの評価の順位が変わることはなかった。

5.2 本研究における発言抑制行動が発言者の印象に与える影響について

本研究では、発言抑制行動を取り上げて、発言者 3 名の印象について、発言抑制行動の有無で差が生じるかについて検討をした。

発言抑制行動は、律的か他律的にかかわらず、自分の意見や気持ちなどについて表出しない行動のこと(畑中,2003)である。この定義に沿えば、コミュニケーションを回避する目的や、何を話せばよいのかわからないなどの理由、つまりスキルの不足によって「発言できない」状態と相手の状況や場面に合わせて今は話すべきでないと判断したことによる「発言しない」状態は、どちらも発言抑制行動ではある。しかし、これらは発言抑制行動を表出させるに至った経緯が異なり、他者から見た際の評価も異なると考えられる。スキル不足による発言抑制はネガティブな印象を持たれ、状況に合わせた発言抑制はポジティブな印象を持たれると考えられた。発言抑制行動が起きる状況としての「スキル不足」や「規範・状況」に関連している社会的スキルについて、観察者(被験者)が発言者の社会的スキルの有無をどのように推測するかによって、発言抑制行動に対する印象も異なると考えたのである。具体的には、課題解決場面における発言抑制行動は「規範・状況」として認識され、社会的スキルも高く認識され、一方で日常会話場面における発言抑制行動は「スキル不足」とみなされ、社会的スキルも低く認識されるのではないかと、という仮説であった。

その結果、発言抑制行動を表出することで、発言者に対する印象評定は異なる結果となったが、本来予想していたものとは異なる結果となった。つまり、スキル不足による抑制に対して抑制しない時よりもポジティブな印象を持たれ、状況に合わせた抑制に対しては抑制していないときよりもネガティブな印象を持たれていた。このような結果が出た理由としては、発言抑制行動の行動意図が上手く被験者に伝わらなかった可能性が考えられる。実験刺激に使用した会話の中で表出した発言抑制行動についてどのような行動意図が認識されたのかについては明らかにしていない。それぞれの発言抑制行動の行動意図の推測をさせて確認する必要があった。

5.3 本研究における社会的スキルの影響について

本研究では、発言抑制行動を行った際の話者の印象に関連する要因として社会的スキルを取り上げた。会話は「話すこと」と「聴くこと」から構成されているわけなので、社会的スキルの中でも話すスキルと聴くスキルが特に必要になってくると考えられる。

会話行動は、二者以上の相互作用なので、話すことと聴くことを交互に行う必要がある。話すスキルについては、自分の話したいことについて過不足や誤解なく、適切に相手に伝えることができるということである。聴くスキルについては、相手の話を受容するということである。そして相手が話している途中で自分が発言したいと思っても発言するのを少し待つということも聴くスキルである。

発言抑制行動を表出していることについて、うまく話すことができなくて「話すスキルがない」というふうに認識されるのか、相手の話を聴こうという態度を示して「聴くスキルがある」というふうに認識されるかによって発言抑制行動のもつ意味合いが異なるということである。「話すスキルがない」と認識されるということは、コミュニケーションがうまくないと評価されて良い印象は持たれず、「聴くスキルがある」と認識されるということは、その場の状況や相手の様子をきちんと考慮していると評価されて良い印象を持たれると考えられる。

本研究では、社会的スキルの中でも特に「話すスキル」のほうに焦点をあてて評定を行わせて検討を行った。「聴くスキル」についても取り入れたが、頷きや相手の注視などの外見的な要因については印象評定を行う際にも影響があると考えられたため、排除したので、本研究では扱っていない。

実験の結果を見ると、日常会話場面で、発言者 A について抑制なし条件のほうが有意に

高く評価されていた。これは予測に沿った結果であった。

しかし、発言者同士を比較すると、会話条件や発言抑制の有無で社会的スキルの評価が相対的に変わるということは見られなかった(検討Ⅱ)。

本研究においては、発言抑制行動を表出することで表出しない時よりも社会的スキルが高く評価される会話場面や発言抑制行動を表出することで他の発言者よりも社会的スキルが高く評価されるという結果は見られなかった。これには、会話場面の設定に課題があったと考えられる。

会話場面の設定の問題点については次節で述べる。

5.4 本研究における会話場面の影響について

本研究では、会話の場면을課題解決場面と日常会話場面の2種類を設定した。それぞれ、目標や適切な会話のスタイル等が異なる会話場面である。会話場面における目標が異なれば、それに合わせて取るべき行動や発言は異なると考えられ、課題解決場面においては発言抑制行動は比較的ポジティブな印象が持たれ、社会的スキルは高く評価されると考えられる。一方で日常会話場面では課題解決場面とは逆になると考えられる。

検討を行った結果、各発言者の社会的スキルの評定や会話全体に対する評価については、予想した結果が得られなかった。

その理由のひとつとして、シナリオの質の問題が挙げられる。本研究では会話場面の設定を行ったが、発言の順番やそれぞれの発言の持つ意味(意思表示や提案など)といったことについては十分考慮されていなかった。特にどのような意味を持つ発言を行うのかによって形成される印象が異なることが考えられるので、その点についても十分に考慮した上で実験刺激を作成する必要がある。

また、シナリオの質が異なっていたので、本研究で得られた会話場面の比較の結果についても、普遍的なものでない可能性も考えられる。実験刺激のために作成したシナリオの話題について、話題の重要度などが今回設定したものと異なれば明確な結果が得られた可能性もある。

さらに、本研究では実験手順の関係で被験者への負荷を考慮して各会話は1分程度とし、また、各シナリオの最後は、その先も会話が継続していくような言葉で終わらせるように作成したが、各会話場面の特徴が十分に反映されていなかった可能性も考えられる。各会話場面において、シナリオや話題を設定して実験刺激を作成した。しかし、特に課題解決

場面について、話し合いをする場面の会話として提示するには1分では短く、状況がうまく伝わらなかった可能性も考えられる。日常的な会話場面において、課題解決場面のような議論の場で1分で議論が収束することはあまりないと考えられ、逆に実験刺激が不自然になってしまった可能性がある。実験刺激の長さにおいても考慮する必要はあったと考えられる。

5.5 今後の課題

今後の課題を以下に挙げる。

本研究において発言者たちにはあらかじめ作成したシナリオをもとに会話を行わせている。そのため、彼らの自然の発言・会話とは多少乖離している部分はある。そのため、発言者の自然な発言・会話が行われている際の発言抑制行動に対する評価についても検討する必要があるだろう。

被験者が発言抑制行動の行動意図をどのように推測していたのか、また発言抑制行動を行っているとは認識していたのかについては、本研究では触れていない。そのため、発言抑制行動の行動意図の推測や行動が認識されているのかという確認についても行う必要があるだろう。

実験実施時に、発言者たちの外見やしぐさなどの視覚的な情報は排除して音声情報のみの刺激を作成した。しかし、声の高さや強さなどの音声の情報からもパーソナリティの推論は十分におこなわれる(内田,2000 など)。そのため、今回得られた結果は全ての状況にあてはまるものではないと言わざるをえない。音声の特徴の与える影響について検討をする必要があるだろう。

また、今回行った実験では、発言抑制行動を表出する発言者は男性であり、その他の発言者は女性であった。また、発言者同士は友人関係があるという設定で実験を行った。会話構成員の性別や関係性のパターンについても考慮して比較を行う必要もあるだろう。

会話行動における、行為者(本研究では発言者)の条件と、観察者(本研究では被験者)の条件と、状況(本研究では会話場面や発言抑制行動)の条件が異なることでも、結果は異なるものになっていると考えられる。様々な条件についてひとつずつ統制を行いながら検討を行っていく必要があるだろう。

5.6 終わりに

本研究では、課題解決場面と日常会話場面という2種類の会話場面を設定して、それぞれの場面における発言抑制行動について各発言者の印象評価と社会的スキルの評価を用いて会話場面の違いについて検討を行った。その結果、明確な結果を得ることはできなかった。原因としては、実験条件の設定の上で条件の統制が行い切れていなかったことが挙げられる。条件の統制についての問題を解決した上で会話場面間の違いについて明らかにすることができれば、会話場面によって、発言抑制行動を表出しない方が望ましい場面と表出する方がむしろ適切になる場面を挙げることができたであろう。

会話場面によって発言抑制を行うか行わないかどちらが望ましいのかということをも明らかにすることで、日常生活での会話場面において、どのような行動を取ることが適応的なのかということを示せ、円滑な会話行動を行うための方法を示すことができるのではないかと考える。

会話の場面についても、本研究で取上げた以外にも様々な観点の分類が存在しているため、それぞれの観点から検討をおこなっていくことで、より詳細な条件下における発言抑制行動の適切性について明らかにしていく必要があると考えられる。

第6章 引用・参考文献

- 阿部晋吾・高木修 (2006). 感情表出抑制の対人的効果 対人社会心理学研究 6
- 相川充 (2009). 新版 人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学— サイエンス社
- Cozby, P.C. (1973). Self-disclosure: A literature review Psychological Bulletin, 79, 73-91
- 大坊郁夫 (1978). 3者間コミュニケーションにおける対人印象と言語活動性 実験社会心理学研究, 18-1, 21-33 福田健 (2000). 会話の達人は人づきあいがうまい 経済界 pp18-23
- 古谷嘉一郎・坂田桐子 (2006). 対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果: コミュニケーションメディアと内容の適合性に注目して 社会心理学研究, 22-1, 72-84
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響 実験社会心理学研究 47
- 後藤学 (2001). シャイネスに関する社会心理学的研究とその展望 対人社会心理学研究 1
- 畑中美穂 (2003). 発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究 74-2
- 畑中美穂・松井豊 (2003). 発言抑制行動の生起過程—研究動向と3段階モデルの提唱— 筑波大学心理学研究 26, 107-120
- 畑中美穂・松井豊 (2003). 会話行動の意思決定過程—会話の上手さの観点による探索的検討— 対人社会心理学研究 3
- 畑中美穂 (2006). 発言抑制行動に至る意思決定過程: 発言抑制行動決定時の意識内容に基づく検討 社会心理学研究 21-3
- 林文俊 (1973). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 25,233-247
- 林文俊 (1976). 対人認知構造における個人差の測定(1)-認知的複雑性の速度についての予備的検討- 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科 23, 27-38
- 平林秀美 (1993). 情動表出の制御に関する発達的研究の概観と展望 東京大学教育学部紀要 33

- 平林秀美 (1995). 情動表出の制御場面の検討 福島大学教育学部論文集 59
- 飯塚雄一・三島勝正・松本卓三 (1985). 面接状況と話題が被面接者の発話の流暢性に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 25, 53-63
- 池田謙一・村田光二 (1991). こころと社会-認知社会心理学への招待- 東京大学出版会 pp123-149
- 磯友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫 (2003). 発話中のうなずきが印象形成に及ぼす影響 —3 者間会話場面における非言語的行動の果たす役割— 電子情報通信学会技術研究報告.HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 103(410), 31-36
- 川名好裕 (1986). 対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 26-1, 67-76
- 木村昌紀・磯友輝子・桜木亜季子・大坊郁夫 (2005). 対人社会心理学研究, 5, 39-47
- 木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫 (2010). 社会的スキルとしての対人コミュニケーション 認知メカニズムの検討 社会心理学研究,26-1,13-24
- 木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 (2012). 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響-関係継続の予期と関係継続の意思の観点から- 実験社会心理学研究, 51, 69-78
- 西田公昭・浦光博・桑原尚史・榎野潤 (1988). 対人的相互作用に及ぼす会話の媒介的影響 社会心理学研究, 3-2, 46-55
- 西原陽子・砂山渡・谷内田正彦 (2008). 発話テキストからの人間の仲の良さと上下関係の推定 電子情報通信学会論文誌 J91-D,78-88
- 小川一夫 (1995). 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房 pp.131
- 小川一美 (1998). 対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題 教育心理学年報 50
- 小川一美・吉田俊和 (1998). 発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果-決めつけ型発話と会話場面の観点から- 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 45, 9-15
- 小川一美・吉田俊和 (1999). 発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果(2)-叙述的発話と断片的発話の比較- 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 46, 131-139
- 小川一美 (2000). 初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要.心理発達科学 47
- 小川一美 (2003). 二者間発話量の均衡が観察者が抱く会話者と会話に対する印象に及

- ぼす効果 実験社会心理学研究, 43, 63-74
- 岡本真一郎 (1996). ことばの社会的スキル 相川充・津村俊充(編) 社会的スキルと対人関係 自己表現を援助する(pp.49-71)誠信書房
- 大橋正夫・長戸啓子・平林進・吉田俊和・林文俊・津村俊充・小川浩 (1973). 相貌と性格の過程された関連性(1)・対をなす刺激人物の評定値の比較による検討 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科 24, 23-33
- 大橋正夫・三輪弘道・平林進・長戸啓子 (1974). 写真による印象形成の研究(2)・印象評定のための尺度項目の選定 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科 20,93-102
- 坂本正裕・チャールズ プリブル・ジェームズ キートン (1998). コミュニケーション回避研究の歴史と現状. 心理学研究, 68,491-207.
- 菅原健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, 7-1
- 田中健吾・相川充・小杉正太郎 (2002). ソーシャルスキルが2者間会話場面のストレス反応に与える効果に関する実験的検討:2者間のソーシャルスキルにおける相対的際の影響 社会心理学研究, 17-3, 141-149
- 内田照久 (2009). 音声の韻律的特徴と話者のパーソナリティ印象の関係性 音声研究 13-1,17-28
- 浦光博・桑原尚史・西田公昭 (1986). 実験社会心理学研究, 26-1,35-46
- 山口裕幸 (2003). チーム・エラーの発生機序に関する研究 日本社会心理学会第44回大会
- 吉田俊和・橋本剛・小川一美 編 (2012). 対人関係の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 和田実 (1995). 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, 11, 11-17
- 渡部麻美. (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題—4要件の視点から—. 教育心理学研究, 54,420-433

謝辞

本論文の執筆にあたり、本当にたくさんの方々のお力添えをいただきました。ここに御礼申し上げます。

本研究の実験に際しまして貴重なお時間をいただきました安藤直樹先生、川島誠先生、また実験に協力をしていただいた学生の皆様、本当にありがとうございました。何度も会話刺激を聞き、多くの質問項目に回答するという時間のかかるものでしたが、最後まで協力していただき本当にありがとうございました。

教育心理学教室の南学先生、中西良文先生、瀬戸美奈子先生、教育実践センターの先生方にもあたたかい助言をいただきました。松浦均先生には研究を進めるにあたって、本当に温かく細やかに、指導をしていただきました。

また、松浦研究室の院生、学部生のみなさんには実験を行うに際して、実験刺激の作成などについて本当に多くの時間をかけて協力してくれました。

そして、学校教育専攻をはじめとする、多くの院生のみなさんにも本当に助けていただきました。園田喜子さん、松浦研究室の後輩たち、学校心理学教室の後輩たち、OBの先輩など、多くの方に支えていただきました。

今回、本論文を執筆するにあたって、本当にたくさんの方々に支えていただきました。本当にありがとうございました。

平成 25 年 2 月 13 日

第7章 資料

会話の印象評価に関するアンケート

この調査は、会話に対する印象評価について調べようとするものです。
これから、会話音声を聞いていただき、それについて回答をしていただきます。
正しい答えや望ましい回答はありませんので、深く考えずに思うままにお答えください。
表紙を含めて9ページあります。ご確認をお願いします。乱丁、落丁などがございましたらお知らせください。

この調査で得られた回答は、すべて統計的に処理され、回答結果は平均値や標準偏差といった統計値で分析しますので、個人的に誰がどのように回答していたかを見ようとするものではありません。回答結果のデータ入力後、質問紙は適切に処理しますので、回答者の方に個人的なご迷惑をかけることはありません。また、記入漏れがあるとデータが使用できなくなってしまうので、記入漏れのないようにお願いします。

お手数ですが、ご協力をお願いいたします。

2012年11月

学年 _____

性別（ 男 ・ 女 ）

本調査に関して疑問や感想などがございましたら、
下記までご連絡ください。

三重大学大学院 教育学研究科 学校教育専攻
社会心理学研究室
修士2年 近藤 亜裕美
Mail : 211m003@m.mie-u.ac.jp

I 会話を聞いて、Aさん がどんな人物であると思いましたか。
以下の項目について1から7の当てはまるところに○をつけてください。

1	積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
2	人のわるい	1	2	3	4	5	6	7	人のよい
3	なまいきでない	1	2	3	4	5	6	7	なまいきな
4	ひとなつっこい	1	2	3	4	5	6	7	近づきがたい
5	にくらしい	1	2	3	4	5	6	7	かわいらしい
6	心のひろい	1	2	3	4	5	6	7	心のせまい
7	非社交的な	1	2	3	4	5	6	7	社交的な
8	責任感のある	1	2	3	4	5	6	7	責任感のない
9	軽率な	1	2	3	4	5	6	7	慎重な
10	恥知らずの	1	2	3	4	5	6	7	恥ずかしがりの
11	重厚な	1	2	3	4	5	6	7	軽薄な
12	沈んだ	1	2	3	4	5	6	7	うきうきした
13	堂々とした	1	2	3	4	5	6	7	卑屈な
14	感じの悪い	1	2	3	4	5	6	7	感じのよい
15	分別のある	1	2	3	4	5	6	7	無分別な
16	親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
17	無気力な	1	2	3	4	5	6	7	意欲的な
18	自信のない	1	2	3	4	5	6	7	自信のある
19	気長な	1	2	3	4	5	6	7	短気な
20	不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切な

II 会話を聞いて、Aさん の様子について、
「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」のうち
最も近いものに○をつけてください。

あては まら ない	あま りあ ては まら ない	やや あて はま る	あて はま る
-----------------	----------------------------	---------------------	---------------

1	声の大きさは適当である	1	2	3	4
2	発音や言葉の変化が明瞭である	1	2	3	4
3	適当な速さで話している	1	2	3	4
4	自分の気持ちを素直に表している	1	2	3	4
5	自分の経験を述べている	1	2	3	4
6	自分の言い分や考えを表している	1	2	3	4
7	積極的に会話に参加している	1	2	3	4
8	相手の話に対してコメントしている	1	2	3	4
9	相手の話に対して同意表現が見られる	1	2	3	4
10	相手に対して否定的である	1	2	3	4

I 会話を聞いて、**Bさん** がどんな人物であると思いましたか。
以下の項目について1から7の当てはまるところに○をつけてください。

1	積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
2	人のわるい	1	2	3	4	5	6	7	人のよい
3	なまいきでない	1	2	3	4	5	6	7	なまいきな
4	ひとなつこい	1	2	3	4	5	6	7	近づきたい
5	にくらしい	1	2	3	4	5	6	7	かわいらしい
6	心のひろい	1	2	3	4	5	6	7	心のせまい
7	非社交的な	1	2	3	4	5	6	7	社交的な
8	責任感のある	1	2	3	4	5	6	7	責任感のない
9	軽率な	1	2	3	4	5	6	7	慎重な
10	恥知らずの	1	2	3	4	5	6	7	恥ずかしがりの
11	重厚な	1	2	3	4	5	6	7	軽薄な
12	沈んだ	1	2	3	4	5	6	7	うきうきした
13	堂々とした	1	2	3	4	5	6	7	卑屈な
14	感じの悪い	1	2	3	4	5	6	7	感じのよい
15	分別のある	1	2	3	4	5	6	7	無分別な
16	親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
17	無気力な	1	2	3	4	5	6	7	意欲的な
18	自信のない	1	2	3	4	5	6	7	自信のある
19	気長な	1	2	3	4	5	6	7	短気な
20	不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切な

II 会話を聞いて、**Bさん** の様子について、
「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」のうち
最も近いものに○をつけてください。

			あまりあてはまらない	あてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
1	声の大きさは適当である	1	2	3	4	
2	発音や言葉の変化が明瞭である	1	2	3	4	
3	適当な速さで話している	1	2	3	4	
4	自分の気持ちを素直に表している	1	2	3	4	
5	自分の経験を述べている	1	2	3	4	
6	自分の言い分や考えを表している	1	2	3	4	
7	積極的に会話に参加している	1	2	3	4	
8	相手の話に対してコメントしている	1	2	3	4	
9	相手の話に対して同意表現が見られる	1	2	3	4	
10	相手に対して否定的である	1	2	3	4	

I 会話を聞いて、**Cさん** がどんな人物であると思いましたか。
以下の項目について1から7の当てはまるところに○をつけてください。

1	積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
2	人のわるい	1	2	3	4	5	6	7	人のよい
3	なまいきでない	1	2	3	4	5	6	7	なまいきな
4	ひとなつっこい	1	2	3	4	5	6	7	近づきがたい
5	にくらしい	1	2	3	4	5	6	7	かわいらしい
6	心のひろい	1	2	3	4	5	6	7	心のせまい
7	非社交的な	1	2	3	4	5	6	7	社交的な
8	責任感のある	1	2	3	4	5	6	7	責任感のない
9	軽率な	1	2	3	4	5	6	7	慎重な
10	恥知らずの	1	2	3	4	5	6	7	恥ずかしがりの
11	重厚な	1	2	3	4	5	6	7	軽薄な
12	沈んだ	1	2	3	4	5	6	7	うきうきした
13	堂々とした	1	2	3	4	5	6	7	卑屈な
14	感じの悪い	1	2	3	4	5	6	7	感じのよい
15	分別のある	1	2	3	4	5	6	7	無分別な
16	親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
17	無気力な	1	2	3	4	5	6	7	意欲的な
18	自信のない	1	2	3	4	5	6	7	自信のある
19	気長な	1	2	3	4	5	6	7	短気な
20	不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切な

II 会話を聞いて、**Cさん** の様子について、
「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」のうち
最も近いものに○をつけてください。

あては まら ない	あま りあ ては まら ない	や やあ ては ま る	あ ては ま る
-----------------	----------------------------	-------------------------	-------------------

1	声の大きさは適当である	1	2	3	4
2	発音や言葉の変化が明瞭である	1	2	3	4
3	適当な速さで話している	1	2	3	4
4	自分の気持ちを素直に表している	1	2	3	4
5	自分の経験を述べている	1	2	3	4
6	自分の言い分や考えを表している	1	2	3	4
7	積極的に会話に参加している	1	2	3	4
8	相手の話に対してコメントしている	1	2	3	4
9	相手の話に対して同意表現が見られる	1	2	3	4
10	相手に対して否定的である	1	2	3	4

III 会話を聞いて、Aさん・Bさん・Cさんの3人はどのような会話をしていたと思いますか。
以下の項目について、「1.まったくそうでない」から「8.まったくその通りである」のうち、
最も当てはまるものに○をつけてください。

	まったく そうでない	そうでない	あまり そうでない	どちらか といえは そうでない	どちらか といえは そうである	やや そうである	その 通りである	まったく そのとおり である	
1	上手く調整された会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
2	会話に退屈していた	1	2	3	4	5	6	7	8
3	協力的に会話が進んでいた	1	2	3	4	5	6	7	8
4	調和のとれた会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
5	不満足そうな会話であった	1	2	3	4	5	6	7	8
6	テンポの悪い会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
7	冷たい感じの会話であった	1	2	3	4	5	6	7	8
8	ぎこちない会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
9	会話に夢中になっていた	1	2	3	4	5	6	7	8
10	会話の焦点が定まっていなかった	1	2	3	4	5	6	7	8
11	相互に興味を持って会話に取り組んでいた	1	2	3	4	5	6	7	8
12	緊張する会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
13	好意的な会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
14	活発に会話していた	1	2	3	4	5	6	7	8
15	互いに肯定的に会話が進んでいた	1	2	3	4	5	6	7	8
16	会話は退屈なものだった	1	2	3	4	5	6	7	8
17	会話は価値のあるものだった	1	2	3	4	5	6	7	8
18	間延びした会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8

IV 会話を聞いて、Aさん・Bさん・Cさんの全体的な印象はどうでしたか。
「1.とても悪い」から「7.とても良い」のうち、最も当てはまるものに○をつけてください。

	とても 悪い	悪い	悪い どちらか といえは	どちらとも いえない	どちらか といえは 良い	良い	とても 良い	
1	Aさん	1	2	3	4	5	6	7
2	Bさん	1	2	3	4	5	6	7
3	Cさん	1	2	3	4	5	6	7

I 会話を聞いて、Aさん がどんな人物であると思いましたか。
以下の項目について1から7の当てはまるところに○をつけてください。

1	積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
2	人のわるい	1	2	3	4	5	6	7	人のよい
3	なまいきでない	1	2	3	4	5	6	7	なまいきな
4	ひとなつこい	1	2	3	4	5	6	7	近づきがたい
5	にくらしい	1	2	3	4	5	6	7	かわいらしい
6	心のひろい	1	2	3	4	5	6	7	心のせまい
7	非社交的な	1	2	3	4	5	6	7	社交的な
8	責任感のある	1	2	3	4	5	6	7	責任感のない
9	軽率な	1	2	3	4	5	6	7	慎重な
10	恥知らずの	1	2	3	4	5	6	7	恥ずかしがりの
11	重厚な	1	2	3	4	5	6	7	軽薄な
12	沈んだ	1	2	3	4	5	6	7	うきうきした
13	堂々とした	1	2	3	4	5	6	7	卑屈な
14	感じの悪い	1	2	3	4	5	6	7	感じのよい
15	分別のある	1	2	3	4	5	6	7	無分別な
16	親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
17	無気力な	1	2	3	4	5	6	7	意欲的な
18	自信のない	1	2	3	4	5	6	7	自信のある
19	気長な	1	2	3	4	5	6	7	短気な
20	不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切な

II 会話を聞いて、Aさん の様子について、
「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」のうち
最も近いものに○をつけてください。

		あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
1	声の大きさは適当である	1	2	3	4
2	発音や言葉の変化が明瞭である	1	2	3	4
3	適当な速さで話している	1	2	3	4
4	自分の気持ちを素直に表している	1	2	3	4
5	自分の経験を述べている	1	2	3	4
6	自分の言い分や考えを表している	1	2	3	4
7	積極的に会話に参加している	1	2	3	4
8	相手の話に対してコメントしている	1	2	3	4
9	相手の話に対して同意表現が見られる	1	2	3	4
10	相手に対して否定的である	1	2	3	4

I 会話を聞いて、**Bさん** がどんな人物であると思いましたか。
以下の項目について1から7の当てはまるところに○をつけてください。

1	積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
2	人のわるい	1	2	3	4	5	6	7	人のよい
3	なまいきでない	1	2	3	4	5	6	7	なまいきな
4	ひとなつこい	1	2	3	4	5	6	7	近づきたい
5	にくらしい	1	2	3	4	5	6	7	かわいらしい
6	心のひろい	1	2	3	4	5	6	7	心のせまい
7	非社交的な	1	2	3	4	5	6	7	社交的な
8	責任感のある	1	2	3	4	5	6	7	責任感のない
9	軽率な	1	2	3	4	5	6	7	慎重な
10	恥知らずの	1	2	3	4	5	6	7	恥ずかしがりの
11	重厚な	1	2	3	4	5	6	7	軽薄な
12	沈んだ	1	2	3	4	5	6	7	うきうきした
13	堂々とした	1	2	3	4	5	6	7	卑屈な
14	感じの悪い	1	2	3	4	5	6	7	感じのよい
15	分別のある	1	2	3	4	5	6	7	無分別な
16	親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
17	無気力な	1	2	3	4	5	6	7	意欲的な
18	自信のない	1	2	3	4	5	6	7	自信のある
19	気長な	1	2	3	4	5	6	7	短気な
20	不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切な

II 会話を聞いて、**Bさん** の様子について、
「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」のうち
最も近いものに○をつけてください。

		あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
1	声の大きさは適当である	1	2	3	4
2	発音や言葉の変化が明瞭である	1	2	3	4
3	適当な速さで話している	1	2	3	4
4	自分の気持ちを素直に表している	1	2	3	4
5	自分の経験を述べている	1	2	3	4
6	自分の言い分や考えを表している	1	2	3	4
7	積極的に会話に参加している	1	2	3	4
8	相手の話に対してコメントしている	1	2	3	4
9	相手の話に対して同意表現が見られる	1	2	3	4
10	相手に対して否定的である	1	2	3	4

I 会話を聞いて、**Cさん** がどんな人物であると思いましたか。
以下の項目について1から7の当てはまるところに○をつけてください。

1	積極的な	1	2	3	4	5	6	7	消極的な
2	人のわるい	1	2	3	4	5	6	7	人のよい
3	なまいきでない	1	2	3	4	5	6	7	なまいきな
4	ひとなつっこい	1	2	3	4	5	6	7	近づきがたい
5	にくらしい	1	2	3	4	5	6	7	かわいらしい
6	心のひろい	1	2	3	4	5	6	7	心のせまい
7	非社交的な	1	2	3	4	5	6	7	社交的な
8	責任感のある	1	2	3	4	5	6	7	責任感のない
9	軽率な	1	2	3	4	5	6	7	慎重な
10	恥知らずの	1	2	3	4	5	6	7	恥ずかしがりの
11	重厚な	1	2	3	4	5	6	7	軽薄な
12	沈んだ	1	2	3	4	5	6	7	うきうきした
13	堂々とした	1	2	3	4	5	6	7	卑屈な
14	感じの悪い	1	2	3	4	5	6	7	感じのよい
15	分別のある	1	2	3	4	5	6	7	無分別な
16	親しみやすい	1	2	3	4	5	6	7	親しみにくい
17	無気力な	1	2	3	4	5	6	7	意欲的な
18	自信のない	1	2	3	4	5	6	7	自信のある
19	気長な	1	2	3	4	5	6	7	短気な
20	不親切な	1	2	3	4	5	6	7	親切な

II 会話を聞いて、**Cさん** の様子について、
「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」のうち
最も近いものに○をつけてください。

				あまりあてはまらない あてはまらない ややあてはまる あてはまる	
1	声の大きさは適当である	1	2	3	4
2	発音や言葉の変化が明瞭である	1	2	3	4
3	適当な速さで話している	1	2	3	4
4	自分の気持ちを素直に表している	1	2	3	4
5	自分の経験を述べている	1	2	3	4
6	自分の言い分や考えを表している	1	2	3	4
7	積極的に会話に参加している	1	2	3	4
8	相手の話に対してコメントしている	1	2	3	4
9	相手の話に対して同意表現が見られる	1	2	3	4
10	相手に対して否定的である	1	2	3	4

III 会話を聞いて、Aさん・Bさん・Cさんの3人はどのような会話をしていたと思いますか。
 以下の項目について、「1.まったくそうでない」から「8.まったくその通りである」のうち、
 最も当てはまるものに○をつけてください。

	まったく そうでない	そ うで ない	あ ま り そ う で ない	ど ち ら か と い え ば そ う で ない	ど ち ら か と い え ば そ う で ある	や や そ う で ある	そ の 通 り で ある	ま っ た く そ の と お り で ある
1 上手く調整された会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
2 会話に退屈していた	1	2	3	4	5	6	7	8
3 協力的に会話が進んでいた	1	2	3	4	5	6	7	8
4 調和のとれた会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
5 不満足そうな会話であった	1	2	3	4	5	6	7	8
6 テンポの悪い会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
7 冷たい感じの会話であった	1	2	3	4	5	6	7	8
8 ぎこちない会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
9 会話に夢中になっていた	1	2	3	4	5	6	7	8
10 会話の焦点が定まっていなかった	1	2	3	4	5	6	7	8
11 相互に興味を持って会話に取り組んでいた	1	2	3	4	5	6	7	8
12 緊張する会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
13 好意的な会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8
14 活発に会話していた	1	2	3	4	5	6	7	8
15 互いに肯定的に会話が進んでいた	1	2	3	4	5	6	7	8
16 会話は退屈なものだった	1	2	3	4	5	6	7	8
17 会話は価値のあるものだった	1	2	3	4	5	6	7	8
18 間延びした会話だった	1	2	3	4	5	6	7	8

IV 会話を聞いて、Aさん・Bさん・Cさんの全体的な印象はどうでしたか。
 「1.とても悪い」から「7.とても良い」のうち、最も当てはまるものに○をつけてください。

	と と も 悪 い	悪 い	悪 い ど ち ら か と い え ば	ど ち ら と も い え ない	良 い ど ち ら か と い え ば	良 い	と と も 良 い
1 Aさん	1	2	3	4	5	6	7
2 Bさん	1	2	3	4	5	6	7
3 Cさん	1	2	3	4	5	6	7

調査は以上です。 ご協力ありがとうございました。

回答項目の読み飛ばし・つけ忘れがないか、もう一度確かめてくだ